

TSケモミミコミュ障が振りまわされる話。

ケモノ好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り。

TS猫ミミコミュ障元大学生が陽キャ犬ミミ快活美少女に振りまわされるお話……を指摘した。

目次

第12話	83
第11話	76
第10話	68
第9話	60
第8話	53
第7話	46
第6話	38
第5話	31
第4話	22
第3話	15
第2話	9
TSケモミミコミュニケーション障が振りまわされる話。	1

TSケモミミコミュ障が振りまわされる話。

特に、何かやりたいことがあるわけではなかった。

小学校では100点が当たり前だった。小テストも満点が当たり前で、できて当然だと思ってた。

中学校ではこんなもんだと思うようになった。小学校みたいに行かなくて、受験なんていうイベントにひーこら言ってた。

高校ではこれでいいかと思った。親に入れと言われた高校に入つて、大学に行きなさいと言われたから大学を目指して、そこそこ友達と遊んでた。

大学じゃあ現実を知って。ついにイベントもなくなって、ただ漠然と単位を取ることだけを考えていた。

そんなこんなで大学三年生の夏頃。俺はただ就職するんだなーって思いながら、漠然と日々を浪費する生活を送っていた。

何もやりたいこともなく、何をしたいこともなく、夢もなく。

ああ卒論やらなきゃな。ああ内定貰わなきゃな、なんてことを考えながら、ありがちな不安を抱えて毎日を過ごしていた。

そんなある日。世界で奇妙な病気が流行り出した。

——アニメリアアシンドローム
獣化症候群。

身体に動物の耳や尻尾が現れる病、だそうだ。

原因不明。正体不明の病に、世界はそれはそれは沸いていた。まあ、日本だけはリアルケモミミに興奮してたけど。

世界中が大騒ぎする中、そんな病気もあるんだなあ、と考えて俺は特に気にもしなかった。自分のことで手一杯で。

ただ流されていけば、幸せになれると思ってた。必要なことだけ考えていれば、それなりにいい人生をおくれると思ってた。

俺の髪が、灰色に染まるまでは。

「は？」

その日、アニマリアシンドローム 獣化症候群・日本第一号、特殊症例が確認された。

春一番が吹き込む、二月の頃だった。

「——ミナちゃん、ミナちゃーん」

誰かが呼ぶ声がある。シャアーという音と共に、俺の顔に日光が差した。

どうやら、朝が来たらしい。けどまだ寝たい。せつかく暖かい毛布に包まれているのに起きなければならないのか。

「ほーら、ミナちゃん。起きて！ 朝ごはん持ってきたよ」

「ん、う……まだ、寝させて」

「ダメです。ご飯を食べるのも仕事なんですから！ ってそんな可愛い仕草してもダメです！」

ぐう、仕事と言われれば断りづらい。だけど、眠くて眠くてしょうがない。しかし微睡眠も捨てがたく……

「ひにやつ!？」

「ミナちゃん、起きました？」

「起きましたっ、起きてますっ!」

「今日は起きる日ですから、予定も詰まってるんですからね」

「わかりましたっごめんなさい起きましただから手を放してくださいっ
いっ」

彼女の手には俺の尻尾が握られていた。尻尾を握られると力が抜けるから無遠慮に触るのはやめてほしい。……この場合、起きなかった俺が悪いのだけれど。

「じゃあ、ご飯持ってくるから待っててね」

「……………むあい」

そうして運ばれてくる朝食。ご飯に魚に味噌汁という、いかにも平凡な朝食だった。

「ミナちゃん、今日の予定は……………」

「ハツキさん、ミナちゃんやめてくださいって。むずむずします」

「かわいいじゃない？」

「撫でながら言われるとペットみたいな気分になるんです！」

だから耳をくにくに撫でるのはやめろ。尻尾を右に左にしたんしたんしながら睨みつけてみる。

だがあまり効果はないようで、「かわいい〜」と一蹴されてしまう。こりやダメだ。そう判断して、魚を口に運ぶ。うん、美味しい。

「それで、今日の予定なんだけど……………」

「むぐ。バイタルチェックと運動能力ですよね」

「そうそう、あとそれと血液検査もあるから」

「そうなんですか。わかりました」

極めて事務的に返して、味噌汁を啜る。

ここに来て、はや3ヶ月。

意外と研究対象モルモットな生活も悪くなく、悠々自適に暮らしている。毎日の早起きと検査が苦じゃなければ、楽で仕方がない生活だ。お給金も払われるし、就職に悩まなくてもいい。なんて楽な生活だ。まあ、自由度が低いのがたまに傷だけど。

「じゃ、おめかししましょうっか」

「あの、二十歳はたちの元男に言うの恥ずかしくない？」

「今は女の子でしょ？」

「……………まあ、そうですけど」

そうしてなされるがまま、俺は部屋に備え付けられた洗面台に連行され、鏡の前に座らされる。そうして目に入るのは、今の俺の姿だ。

銀と黒の中間のような灰色の長髪に、鳶色の瞳。揺れる尻尾と時折動く耳がついた、現実離れした少女がそこに立っていた。

髪を長くしているのは、研究の一環だ。本当はぱつぱりと切りたい

が、髪も研究材料の一つらしい。というわけで、髪を短くするのは自
粛させてもらっている。長いと蒸れて面倒なのだけれど仕方がない。

「さて、しつかり決めますよ〜!」

「……………ほどほどによろしく」

「任せて〜!」とハツキさんは言うのと、さつそく櫛やらヘアゴムやらを
持ち俺の髪をまとめにかかる。ハツキさんは弟妹が多いらしく、やっ
てあげることが多かったからか、子どもの世話は大の得意らしい。
……………俺は子どもではないけれど。

「そういえばミナちゃん。一ヶ月前、新しいアニマリアの子、増えた
じゃない?」

「え、そうでしたっけ?」

アニマリア——症候群に疾患した人たちの略称だ。それはそれと
して、一ヶ月前?

「もう、世情に疎いわよ?」

「なんですその言い回し……………いえ、別に。気にする必要はないと思
まして」

「あらそうなの? で、その子はまあ問題児だったんだけど……………動画
投稿やってて、最近登録者50万人超えたら嬉しいわよ?」

「……………はい!?!」

登録者50万人……………は置いといて、動画投稿!?

「え、あ、あの。動画投稿、ですか!」

「そうそう。あの子検査断っているところ行って、遊んでたから
健康診断も大変で。動画を見る限り元気そうでよかったわ」

髪を梳くハツキさんをよそに、俺はそれどころじゃなく。それ以
上、ハツキさんの話は聞く気にはなれなかった。

「はあ、終わったあ……………」

そして夕方。検査が全て終わり、やっと安住の住処に帰ってこられ

た。ぽすんつとベッドに身体を投げ出して、枕を抱きしめた。

そのままスマホを手にとって、ゲームを開く。それが仕事終わりの日課だった。だけど今日は指が止まる。

「アニマリアが動画投稿、ねえ……」

思わず、そう呟いた。ハツキさんが言っていたことが、妙に頭にこびりついていた。好奇心もあるが、それ以上に怖くもある。だけど……

うんうんうなって結局、その人の動画だけ見てみよう。そう思っ
て、久しく開いていなかった動画アプリを開いた。オススメに出てく
る動画を見ないように、予測変換も見ないように動画を検索する。す
ると、案外簡単に投稿主を見つけることができた。少しだけ躊躇っ
て、動画を再生する。

『こんにちはー！ トーリです！』

「にやつ!？」

いきなりの絶叫に、変な声が出た。久しぶりにアプリを開いたせいで、ボリウムを大きくしていたらしい。慌てて音を下げ、こほん、と息を取り直して再生する。

『皆さんこんにちは！ 今日ですぬ〜……』

見る限り、犬のアニマリアだろうか？ どこか人懐っこい顔は、なるほど、確かに人気が出そうだ。

こうして始まったのは質問コーナー。コメントやSNSに書き込まれていた質問に答えていく、というありふれたものだった。

『耳は本物ですか？』 本物だよ。ふりふり………つて言っても動画だから証拠もないけどね！』

『何のアニマリアなの？』 犬！ らしいよ？ 何で判断してるかは知らないんだけどね』

『ちいちゃんいつ来るの？』 気分だよ！』

『尻尾でドミノ倒しして』 よし、完成！ 行きます！ ……は
い！ なんだこれ』

……まあ、本当にありふれたものだった。

次々と質問に答えて、意味のわからないリクエストにも丁寧に答えていく。特に意味のわからないのは「尻尾洗うときに使う洗剤はどれくらい美味しいですか」だ。なぜそれを選んだのだろうか。

『よし、じゃあ今日はこれまで！ じゃあね〜！』

そう言つて、彼女の動画は終わる。

最後まで笑顔で、ほんのちよつと前に動画投稿を始めたなんて思えないくらい、上手に。それでいて、作りものとは思えないくらい、心から本当に楽しそうに笑つていて。

「……自分には、無理だなあ」

頭から布団をかぶり、そう呟いた。

きつと、彼女は思ったこともないのだろう。人間が自分たちをどう思うかなんて。

脳裏に思い浮かぶのは、アニマリヤになったばかりの周りの人の顔。

——その顔はどれも、遠回しに責めているようで……

「……っ！」

モヤモヤした気分を払うように、枕に顔を押し付けた。だけど、一向に気分は晴れなくて。鬱屈した気分、泣きたくなった。

——、
……、

「——て、起きてー！」

「……ん、あ？」

誰かの大声で目が覚めた。薄らと開けた目を動かせば、カーテンの隙間からは日光が差し込んでいた。……って何で朝に。どうやら、寝てしまっていたらしい。ハヅキさん、起こしてくれてもよかったのに……

「ハヅキさあん……何で起こしてくれなかったんですか……」

慣れない寝方をしてしまったせいかな痛む関節を伸ばし、恨みがましげにハヅキさんがいるであろう場所に目を向ける。夕飯だって仕事の一種だろうに、なぜ起こしてくれなかったのか。お腹が減った——

「かわいいっ!!」

いきなり、ハヅキさんに抱きつかれた。なぜだ。ハヅキさんいつもそんなことしてこなかったくせに！ 流石に距離が近すぎっ……

「な、何してるんですかつ、ハヅキさ——」

——その言葉は、続かなかった。

だって、ハヅキさんだと思っていた人は、ハヅキさんではなかったからだ。

「おはよう！」

そう言っただけで元気に挨拶をしたその人。

快活そうな笑顔を引っ提げて、雰囲気はバツチリあつたケモノの耳。そして嬉しそうに振られる尻尾……

「……………なんで？」

信じられないという俺に、彼女は笑う。

「初めまして、アニマリアのトリーです！ 会いにきちやいました！」

昨日見た、まさかの人物。

動画で見たよりも映える、人懐っこそうに、ペカーッと輝く笑顔を振りまく彼女。明らかに自分と違う世界の住人に、俺は——

「……………とりあえず、お帰りいただいていいですか？」

「何で?」

第2話

「へー、今ってそんな事できるんだ〜」

「そうなんですよー！ 私が行きつけのお店なんですけど、最近アニマリアにも対応してくれて、すっごく助かってるんです！」

「いいお店じゃない！ そこ、どこにあるの？」

「えつとね〜……」

——なんだこれ。

目の前で行われるハヅキさんとトリーさんの会話を、俺はもぐもぐしながらぼーつと見つめていた。ちなみに、朝ごはんは洋食である。トーストは後のセバターたっぷりでも美味しい。

ちなみに、今二人が話しているのはトリーさんの行きつけの美容院だ。1000円カットに通ってた俺には関係のない話だ。

そもそも、なんでハヅキさんは普通に会話しているのか。その人、侵入者じゃないの？ というか仕事しろ。俺の検査とかしなくないのだろうか。

「それでね——」

「そうなんですよ、だから——」

「ああ！ やっぱり——」

「ええー！ そんな——」

……なんか、居心地悪い。

むぐ、とパンを噛んでジト目をする。でも二人は気付きもしない。なんだこの空気。俺だけ置いてけぼりだ。別に会話に入りたくはないが、目の前で楽しそうに話されるとムズムズする。ぐう。

「それじゃあ今度行ってみるわね！」

「はい！ ぜひぜひ！」

やっと終わったらしい。これで落ち着いてご飯が食べられる……

「そういえばミナセちゃん！ シャンプーって何使ってるんですか

？」

「うぐっ?! げほっ、げほっ!」

「わあ!?! 大丈夫!?!」

思わずむせてしまった……!!

何故俺に会話を振るっ、ハヅキさんと会話しているだけでいいだろうに。というか、トリーさん距離近くない!?

水を飲みながら、息を整える。顔を上げれば、心配そうに顔を覗くトリーさん。これは、どうすれば……と、とりあえず。

「大丈夫、です。喉に詰まっただけですから」

「ホント? よかった〜」

ほっと胸を撫で下ろすトリーさん。いや、大元を辿ればあなたのせいなのですが。とは言わない。

「え、えっと、シ、シャンプー……でしたね。えっと。あの……その、家で使ってたものと同じのを……」

「どんなの?」

「どんなのっ……」

え、いや、そのと短い単語が出ては言葉にならず消えていく。どんなの、と言われたところでシャンプーなんて頓着してないからわかるはずもない。どうすればっ……

「確か○○○だったかしら。あれ良いわよね」

——! ハヅキさんっ!

思わず目を向ければ、ウインクするハヅキさんの姿が……!!

「ああ、あれですか! なるほど、だからこんなにサラッサラなんですか〜」

そう言っつて俺の髪を触るトリーさん。どうやら、納得してくれたようだ。ハヅキさん、ありがとう……!!

……うん?

そこで、思い出した。

……なんでトリーさん、こんなところにいるんだ?

「あ、あの〜……」

「うん、何？」

「え、えつと、その、なんていうか。なんでトリーさんがこんなところに？」

「ああー！」

「そうでした！」というトリーさん。え、まさかシャンプー談義で忘れてたとか？ そんな俺の気持ちをよそに、トリーさんはその要件を口にする。

「ミナセちゃん！ 私の動画に出てくれませんか!？」

――、

「お断りします」

「即答!？」

いや、だって無理でしょ。

「なんでえ〜、楽しいよ〜?」

「説得する気あります!？」 尻尾撫でながら言われても説得力ないんですけど!？」

ええい、なんでこの人こんなに絡んでくるの!？」

俺が断った瞬間、トリーさんは俺に抱きついて懇願してきた。しかもちよつと泣きが入ってる。

「あ、あの、俺人前に出るとか無理なので、全世界に晒されるとか本当にダメなので！」

「あ、自分のこと俺って言うんだね。珍しいね〜」

「そこですか!？」

どうしよう、この人。話が絶妙に噛み合わない。

一度受けて、ドタキャンする？ いや、そんなの無理。面倒なことになるのが目に見えてる。メンタル的にも。じゃあ、すっぱり断る……？

ちらつと、トリーさんを見る。

その目はキラキラしていて、純真無垢な子どものようなよう。

ああ、ダメだ。断ったら断ったで粘着される。断ってもダメ、受けてもダメ。こんなもんどうすればいいんだ。

そも、俺は二度と人の前に立ちたくないのだ。これ以上、見せ物にされるのはごめんなのだ。

「はい、そこまで。トリーちゃん、流石に詰め寄りすぎよ？ 理由も話さなきゃ、了承できるもできないも無いと思うわよ？」

——！ ハツキさん！

「むう、はあい……」

トリーさんはその言葉を聞くなり俺の上から退いた。

ああ、ありがとう。ハツキさん……！ 一度ならず二度までも、本当にありがとう……！

ハツキさんに感謝を捧げる俺に、トリーさんはこほんと息を一つ。そして、その真意を口にする——

「えーつと、こほん。ミナセちゃんに動画に出てほしいって思ったのはね。仲良くなりたいなーって思ったからなの」

「……はい？」

——仲良く、なりたい？

「一緒のことやれば、仲良くなれるかなあつて」

「あの、それ別に動画に出ることじゃなくてもいいんじゃない？」

「かわいいから、動画に出たら映えるなあーと思ったから」

そう言つて、トリーさんは俺の瞳を真っ直ぐに見つめる。その瞳はあの動画で見たように、心からそう思っているようで……

——だけど、無理だ。

「——無理、ですよ。かわいいなんて言ってますけど、俺、男ですから」
こういう類なのは、早めに切った方がいい。そう判断して、そう
言った。

これでいい、はずだ。そうすれば、勝手に人は離れていく。気持ち
悪がられるのも、遠巻きにされるのももう慣れてる。今更、一人増え
たくらいでどうってことはない。

彼女もそう思うはずだ。男のくせに女になったって、気持ち悪いっ
て、そう……

「うん？ 男の娘ってこと？」

——へ？

「え、でも胸は……あるよね？」

「……？ つてどこ触ってるんですか！」

驚いている隙に、トリーさんは俺の胸に手を置いていた。反射的に
手を払い除け、ベッドの上に飛び乗った。

ついでに、警戒を込めて睨む。だから「猫みたくい」つて言うんじや
ない。猫だけだ。

「えっと、どういうこと？」

「……性別が変わったんですよ。俺の性別は元々男です。発症と同時
に女になったんです。日本で特殊症例が出たってニュースやってた
でしょう？ 多分」

「あー、そうなんだ。それで、なんでそれが動画に出られない理由な
の？」

「何でって……気持ち悪いでしょう。いきなり男が女になったなん
て」

「そんなことをないと思うよ？」

「え……」

さも当然、というように、彼女はきよとん、とした顔で続ける。

「別に、そんなこと思わないよ。初対面だし……何も知らないから
ミナセちゃんを知らないのに、そんなこと言えないよ」

それは、俺にとって初めて聞いた言葉で。

「それに、こんなかわいいのに、嫌うなんて無理だよ」

俺を否定しない、という言葉だった。

少なくとも、何も知らないから嫌わない。俺のことを知らないから嫌えない。そう、いうことだ。

変わってしまったかもしれないのに。俺を知られて、嫌いになっ
てしまったかもしれないのに。

「……あり、がとう」

思わず、そんな言葉が口から滑り落ちた。初めてだった。そんなこ
とを真正面から言われたのは。なぜか無性に嬉しくて。恥ずかしく
て。思わず顔を俯いてしまう。

「じゃ、そろそろ準備しましょうか」

「——はい？」

「やったー！ それじゃあ待ってるね！」

そんな感情は、ハヅキさんの言葉でかきけされた。その言葉を聞く
なり爆速で出て行ったトリーさんを引き止める間も無く、俺はハヅキ
さんに肩を掴まれていた。その顔は、笑顔を浮かべてはいるものの、
逃しはしないという圧力があつて……

「え、あの、ちょ……」

「はい。じゃ、ミナセちゃん。久しぶりの外出よ。ちゃんとお化粧
しましょつか！」

「話聞いてます?! え、ちょ——」

必死の抵抗も虚しく、結局俺は爪から何まで綺麗にされて、出るこ
とになってしまった。

——三ヶ月前から、出ていない外に。

第3話

かんかん照りの空。

心地よく肌を撫でる風。

ほどよく目を遮る雲。

6月の空をほどよく彩る街々。

——そして……

「うんっ、良い天気だね！」

「そ、そうですよねー……」

——突き刺さる視線ツ……！

周りの人間は、犬のミミと尻尾が生えた人間——トリーさんに視線を向けている。どこからか、「アニマリアだー」とか「トリーさんだー」とかそういう声が聞こえて来る。そうになると当然、隣にいる俺にも視線が来るわけでっ……！

何で、こうなったのだろう。俺は必死に思考を巡らせ、この状況をどうにかしようと打開策を考える……ダメだ、何も思いつかないっ。

「でしょー！ ミナセちゃん！」

「え、あ、はい。そう、ですね……」

空気に気付いて、視線に気付いてっ……！ 切実に視線で訴えるも、トリーさんは気にした様子もない。だけど俺にとっては死活問題だ。

周囲を見渡せば、やはりその視線は俺たちに向いていて……うん、すごい落ち着かない。

「そういえばミナセちゃん、男だっって言ってたのに自分からスカート履いてたね！」

「あ、それはそのっ……」

言及されて思わず、俺はスカートを押さえた。そう、俺は今、スカートを履かされている。いや、自分で履いたは履いたんだけど……

「尻尾隠すには、スカートしかなかったんです……すごく落ち着かないし」

「えー！ かわいいのにー！」

「かわいいって言えば何でもいいと思ってません!？」

だから「残念」じゃない。俺は見られるのが嫌なのだ。そも、外に出るのも久しぶりすぎてドキドキしてるのに、アニマリアってバレてジロジロされるのも嫌なのだ。

というか、なぜ研究棟にサイズぴったりの服があんなにあるんだ。帽子があつたのはありがたかったけど。

初めて履いたスカートにドギマギしながら、俺はトリーさんの後を追う。帽子を落とさないように、必死に押さえながら。帽子をかぶると音が聞こえづらいが、耳がいいからあまり問題はなさそうであった。と、内心安堵する。

「……ん？」

ふわりと、何かいい匂いがする。果物や砂糖が混ざったような、甘い香り。思わず、匂いの元を探し——それは、そこにあつた。

それは、クレープ屋だった。

幸い、まだ行列にはなっていないようで、人はちらほらという程度だった。

……食べたいなあ。

俺は甘党だった。アニマリアになる前は、スイーツをよく買って食べていたけど……研究棟の中は、正直なところそんな甘いものなんて用意されてなかった。許可を貰えば外に出てはよかったが、外に出たくなかった俺は、誰かに頼むしかなく。だけどお願いするにも恥ずかしくて、当分スイーツなんて食べてなかった。

「いい匂いするねー！」

「っ、はい、そうですね……」

クレープの匂いにぼーっとしていると、突然トリーさんに話しかけられて、特に考えずに返してしまう。

「あのクレープかなー？」

「そう、みたいですね……」

そう言いながら、足を進めていくトリーさん。そうなれば、当然クレープ屋は通り過ぎることになるわけで。

……名残惜しいが、今この状況で買いに行く余裕はない。今回は素通りさせてもらおう。後ろ髪を引かれる思いだけど……

「食べたいの?」

「……へっ!? な、何をですか!」

「クレープ」

「そ、そんなことは、無い、ですけど!」

「さつきからちらちら見てるし、それにほら……」

そう言つて、トリーさんは俺を指さした。いや、これは俺の後ろ……? その指に従うまま、俺は視線をやると……

スカートが、静かに動いていた。

まるで、何か生き物がいるように、規則的に横に揺れるそれは――

「さつきからスカートの中で尻尾が暴れてるから、気になってるのかなーつて」

「こ、これは――!」

尻尾の動きを見られたこと。クレープを食べたがっているのがバレたこと。それを察せられたことが恥ずかしくて、顔に熱が集まる。

「ち、違って、その、これは! 視線が集まって落ち着かなくて」

「うん、そうなの?」

「そうです!」

「でもクレープちらちら見てたよ?」

「うっ、ぐうっ……」

ダメだ、言い逃れできないっ。

顔に血液が集まっていくのを感じる。もう、自分の顔は見てわかるほどに真っ赤だろう。穴があつたら入りたいくらいだ。

顔を真っ赤にして俯きだした俺を見て、トリーさんはいきなり、俺の手を掴んだ。

「仕方ないなあ〜」

「え？ ちょっと」

そう言つて、トリーさんは俺の手を引き始めた。いきなり引かれた手に、体勢が傾く。思わず帽子が落ちそうになって、空いた手で慌てて押さえた。

「お姉さん！ クレープくださいな〜！」

「はい！ ……つてえ！」

いきなり突っ込んでいったトリーさんに、クレープ屋の店員さんは驚いた声を上げた。だがトリーさんの上から下まで見た後、すぐさま笑顔に戻る。プロだ。

「ミナセちゃん、何がいい？」

「いや、あの……」

「ここまで来て尻込みしないの！ お金はあるから」

「それぐらい持つてます！」

ええい、腹を括ろう。

そう決めて、無難なものを注文する。トリーさんは「じゃあバナナチョコイチゴカスタードチョコチップメロンプリンで！」という謎の注文をしていた。

「お待たせしました〜！」

「ありがとう！」

「あ、ありがとうございます……」

そう言つて渡されるクレープ。俺のはチョコバナナだ。久しぶりのクレープすぎて、結局こんなものしか選べなかった。

「……っ！」

ごくりと喉が鳴る。本当にスイーツなんて久しぶりすぎて、よだれが溢れた。さて食べようか、としたその時だった。

「つて、わっ！」

帽子がズレたのだ。慌てて帽子を押さえ、帽子をあげないように調整する。だけどミミが動くせいでぐらぐらする。

「ミナセちゃんミナセちゃん」

「は、はい。何ですか？」

「帽子、外したら？ せっかく出来立てなのに。それに……」

「それに？」

「尻尾動いてて、今更だから」

そう言つて、トリーさんは笑う。その瞳はなんとというか、生ぬるくて。感じたことのない視線に、俺はなんだかこそばゆさを感じて帽子を深くかぶつて視線から逃げた。

逃げた先にはクレープがあつて。たしかに、帽子を押さえたままだと食べにくい。この身体になつてほしいけど、こういうところはなかなかうまく制御できないのが玉に瑕だ。

視線を落とせば、出来立てクレープ。

時間が経てば、生クリームも溶けて生地も冷めてしまふだろう。

目立つのは嫌だ。だけど、久しぶりのクレープ。隠れる場所は無い。ここで決めねばならない。

……仕方がない。

覚悟を決めて、帽子を掴んで持ち上げた。いきなり耳の詰まりが取れた感じがして、押さえつけられていた感触がなくなった。

少し解放された感覚で、クレープにかぶりついた。途端に広がる、数ヶ月感じなかつた甘み。

チョコもバナナも、中で食べたことはあつた。だけど、一緒に食べるなんて久しぶりだ。

チョコは普通のソースと違ってほろ苦く、バナナは反するように甘い。生クリームは甘さ控えめで、なるほど、バナナを甘いものを選んでいるなら、これくらい甘い方が俺は好きだ。皮ももちもちして食べ応えがあつて、とても美味しい。久しぶりのクレープに、思わず夢中になつて咀嚼してしまう。

そのまま最後まで食べ切ろうとした、その時だった。

「ママ、あれ、なにー？」

「……っ！」

続きを食べようとしたところに響いた子どもの声に、手が止まつた。

背に氷を入れられたような感覚がして、顔を上げる。そこには、大勢の人間が俺を見つめていて。

——やらかした。

久しぶりのクレープに、浮かれすぎていた。周りは俺を凝視して、その歩を止めていて、そこから動こうとはしなかった。

そんな光景に、後悔の念が湧き上がる。周りがどう思うかはわかりきっていた。クレープなんて食べたいと思わなければ。こんな気分にならなくて済んだのに。

身体を縮めて、聞こえるであろう言葉に耳を塞ぐように、この場から立ち去ろうと頭を下げた。

「す、すいませ——」

「お姉さん、私もクレープもらっていいかしら？」

「は、は〜い!」

……あれ?

覚悟していた言葉が、聞こえなかった。それどころか、周りの人たちの視線は今やクレープ屋に向いていて……

「美味しかったんだね、ミナセちゃん!」

「わっ、トリーさん!」

理解が追いつかない事態に呆然としてみると、トリーさんにいきなり声をかけられた。クレープは完食していて、何故か尻尾が忙しなく動いていた。

「あの、どういう状況……」

「え、う〜ん……」

俺の言葉にトリーさんは、少し迷うような素振りを見せた。少しだけ、ソワソワとしていて……突然、「あっ」と、何か閃いたような顔をした。そして、いい笑顔と共に親指を立てる。

「かわいいって、いいよね!」

「どういう意味ですか!?!」

いや、本当にどういう意味。帽子を被り直しながらトリーさんに聞くも、何故かはぐらかされて答えてくれない。本当に、いったい何が起こったのだろうか。……怖いんだけど。

結局、何も教えてもらえず、モヤモヤしたままになってしまった。……まあ、クレープは美味しかったから、よしとしよう、かな。

「それじゃあ、行こっか！」

「え、どこにですか？」

「何って……動画撮影！」

――、

忘れてたアーーっ！

第4話

俺は、何をしてるんだろう。

「こんにちはー！ トーリだよ！ 今日はゲストに来てもらってます！」

知らないうちに始まる、動画撮影。

トーリさんはもう慣れてるようで、お決まりの口上と、企画の内容を明るく、そして楽しみに話し始めた。

「なんと、今日は日本最初のアニマリア、ミナセちゃんに来てもらってます！ いや、許可もらうの大変だったんだよ？ えっと、最初会ったとき、すっごくかわいくてね〜」

やめて、やめて……プレッシャーかけないで……

動画撮影はまだ始まったばかりだというに、俺はもう瀕死だ。あのカメラの中に生気が吸われてるのではないだろうか。

心なしかげっそりした気分で、動画の成り行きを見守る。そして、その時が来る。

「じゃあ、ミナセちゃん、どうぞ！」

——来た。

覚悟を決めねばならない。今日だけで何度覚悟を決めたかわからないが、もうここまで来たらやるしかないのだ。普通に出るより恥ずかしいかもしれないけど……！

そして、力を抜いて画角に飛び入った——

——俺の尻尾だけ。

「はい！ ゲストのミナセちゃんの尻尾です！ さあ、やっていきましよう！」

ああ、どうしてこうなったんだっけ。

画角には入らないところで頭を抱えた。そんな俺を無視してトリーさんは淡々と撮影を続けていく。

ふと、カメラを見た。そこには、だらりと力なく垂れる俺の尻尾が映っていて。

あまりにもシユールな光景に、俺は力なくうなだれた。

「ここが私の家なんだ〜」

結局、あれから逃げることもできず、トリーさんの家に来ることになってしまった。クレープに夢中にさえなっていないければ、まだ引き返せたかもしれないのに。

「いや、それにしても……」

大きいな、とひとりごちた。

見上げれば、立派な一軒家。俺の住んでいた家よりもはるかにでかい。そんな邸宅の鍵を開けて、俺を誘うトリーさん。こんな家なのに、まさか一人暮らしなのだろうか？

「ひ、一人暮らしなんです。こんな立派なのに……」

「あ、ううん！ お父さんが遠くで働いてるだけだよ！ まあ、実際一人暮らしみたいなもんなんだけどね〜」

「だから自由に撮影できたりするんだけどね！」と楽しげに笑うトリーさん。それ、関係あるのかなと思うも、口には出さなくておく。

「お、お邪魔します……」

「はい、いらっしや〜い〜」

案内されるがままに、俺は屋敷に一步踏み入れた。

「ごっち〜ごっち〜」

誘われるがまま、家の奥へと進む。トリーさんの尻尾はぶんぶん振られていて、嬉しくてたまらないという様子だ。なんというか、人の気も知らないで……という気分させられる。

「で、ここが私のスタジオだよ」

そう言つて、トリーさんは一つの部屋を開けた。そこには、いかにも撮影部屋、という品々が置かれていた。

カメラにソファ、パソコンに机、といった必要最低限のものだけ置かれ、あとは見栄えを良くするためのアイテムが並べられていた。

「どう、ニッキー！」

「あ、いいんじゃないですか？」

俺に聞かないで。たしかに動画はよく見てたけど、正直、撮影のイロハなんてものは全く知らないのだ。そんなことを聞かれても困つてしまうわけで。十人並みの言葉しか返せないのだ。

「よーし、じゃ、準備始めよっか！」

「ちよ、ま、待つてください！俺、別に動画に出るとは……」

「え〜！」

俺がそう言うどぶ垂れ出すトリーさん。ついでに縋り付いてきた。それを手で押しつけて、俺はなんとか距離をとる。ほんの数センチだけだけど。

「やろうよ〜！ね？ここまで来たんだし！」

「何でそこまで誘おうとするのかはわかりません、けど……」

確かにここまで来て、これまででもらって断るのも、よくはないのだろう。だけど、それでも。怖いのだ。

「俺は……」

——聞こえてくるのは、喧騒ばかりで。

「俺はもう」

——五月蠅すぎて、眠れない夜も。

「嫌なんです」

——誰からも、認められないのも。

「……見せ物にされるのは、嫌なんです」

——もう、あんな思いはごめんだ。

そんな気持ちを込めて、トリーさんを押しつけた。頑固で、面倒くさくて、嫌な思いをさせたかもしれないが、俺だって、嫌なものは嫌なのだ。

「……そっか!」

トリーさんは、それだけ言って部屋を後にした。諦めたのだろうか。それ、だと……嬉しい、のだけど。

……嫌われたかもしれない。

何を言っているのか。拒絶したのは、自分のくせに。嫌な気分がぐるぐるして、少しだけ泣きそうになった。

「……帰ろう」

そう呟いて、部屋の出口に向かう。せめて、最後にトリーさんに断りを入れておくべきだろう。

そう考えた、時だった。

扉が、勢いよく開かれた。

「ならー! ……これなら出てくれるよね!」

扉をバンツと開けて現れたトリーさん。その手には、クッションと椅子が担がれている。

「これなら身バレしないし、出られるよね!」

そう心底ワクワクした様子で語りかけてくるトリーさんに、とりあえず俺は言うことにする。

「……とりあえず、勢いよく開くのはやめてください」
「わあ!?! ご、ごめん!」

扉の勢いでひっくり返ったまま、そうごぼした。

そうして今に至るわけである。

“出たくない”を“身バレしたくない”と解釈したトリーさんとの折衷案。それが、尻尾だけ登場する、というものだった。わけがわからない。

なんとかいうか、これ以上意地を張るのもアホらしくなって……というか、無理だと悟ってこれを呑んだわけだが、一体全体、何故こうなったのか……!

「それでは早速……『ミナセちゃん質問コーナー』! というわけで今から質問を募集します! ハツシユタグで……!」

——つて聞いてないよおい!?

ああ、やばい。どうやって止めればいい。何でよりもよって質問コーナー。声をたくさんださなければならぬ企画をつ……! というか初対面で何故、質問コーナーなんて距離感バグった企画をするんだ。そしてそれを楽しそうな笑顔で提案するな、否定しづらくなる。下手に声を出せば動画に入ってしまう。動くなってもつてのほかだ。ど、どうすれば……!

その時だった。

去年のカレンダーとシャープペンを見つけたのは。

こ、これなら……!!

トリーさんはもうSNSで質問募集を始めてしまっている。これ

から止めるには遅いだろう。ならば。

「はい、早速質問を……ってあれ？」

ぱすんつ、と軽い音を立てて、トリーさんの前に落ちたものは、俺の折った紙ヒコーキだった。

「開けてこと？」

うん、その通り。

トリーさんは俺を見る。それに俺は首肯で答えた。すると、「おっけー！」という返事と共に、紙ヒコーキが開かれていく。すると、見えるわけだ。

俺の書いた、メッセージが……！

「【五つまでです】……はあい」

質問に答えるのは五つまで、というメッセージだった。

ごめん、無理だ。あんな楽しそうにしてるトリーさんに企画変えろなんて言えるわけがない。そも、面白い企画なんて思いつくわけでもない。受け入れた時点で負けが決していた。

「おっ、早速来たね！ えーと、【何のアニマリアですか】だって！」

答えを書いて、紙ヒコーキにして投げる。

「えっ、そういう返答方法にするの？ えーと……【猫】。簡潔っ」

うっさい。俺にユーモアを求めないでくれ。エンターテイナーなら、なんとかうまく扱ってほしい。

「次は……【スリーサイズは】……ダメだって、尻尾が言ってるね！」
尻尾を背もたれに叩きつけて返答。恥ずかしくてろくに測ったこともないのに、誰が答えるか。

「【お互いの第一印象は？】かわいい！ あのね、アニマリアって感情わかりやすくてさ、ここにくる時、クレープ見つけて……あいた！」

そんなこと言わんでいいっ。

そんな思いをこめて丸めてほいしたカレンダーはトリーさんの頭にクリーンヒット。なんとかそれ以上喋ることは阻止。

「でも顔真っ赤にしてるから、結構恥ずかしかったり……次行こう！」
さすがに、尻尾の動きで不機嫌なのがバレたらしい。トリーさんはし切り直して次の質問を読み出した。

「は、お疲れ様〜！」

「お疲れ様、でした……」

結局、なんだかんだで質問を五個以上答えさせられてしまった。

変なことを言おうとするたびにカレンダーを丸めて投げて、紙ヒコーキでなんとか意地を伝えていた。最終的に紙が足りなくなつて、千切った玉を撃つてばかりだった。

「楽しかったよ、ありがとね！」

「は、はあ。それならよかったです」

「でも、何で紙ヒコーキだったの？」

「だって……撮影中だったじゃないですか。入らないようにするには、ああするしかないと思って……」

「別に編集するから、入ってきててもよかったのに〜」

「……あ、っ」

そうだ。これ配信とかじゃないから、別に入り込んでも良かったんだ！

「もしかして、気づいてなかったの？」

「うっ……」

テンパりすぎて気づかなかつた、とは言えず。とりあえず目を逸らしておく。なんだか、申し訳ない気持ちになつてきた。

「あの、ごめんなさい。紙投げついたりして。こんな素人が動画に関わっても、面白くなんてないですよね……」

「そんなことないよー！」

「え……」

「紙ヒコーキで会話するのも楽しかったし、尻尾で感情表現してくれるから、動画的にもよかったと思う！ それに……」

そう言つてトリーさんは、朗らかに笑つていた。そして、一層笑みを深めて続ける。

「——ミナセちゃん、仲良くなれたみたいでよかった！」

——え。

「だってミナセちゃん、途中で紙の玉投げつけてきてくれたし、あんなわかりやすい尻尾も見せてくれたし、ああ、仲良くなれたんだなくて」

「そんな、一日も経つてないのに」

「仲良くなるのに時間は関係ない、でしょ？」

ま、眩しすぎる……！

思わず目を細めて、一歩下がつてしまう。仲良くなるのに時間は関係ないってリアルで初めて聞いた……

困惑する俺に、トリーさんはいきなり抱きついてきた。

「わっ、トリーさん!?!」

いきなりすぎる出来事に、思わず身体が硬直する。そんな俺を置き去りに、トリーさんは優しい声音で言った。

「……ありがとう。動画に出てくれて。おかげでとっても楽しかった」

「——あ」

その言葉は、とても優しかった。

抱きしめられた体温と、身体をくすぐる尻尾に、顔が熱くなつていく。

——言わなきや、ならない。

自然と、そう思つていた。

誘つてくれたこと。クレープに付き合つてくれたこと。言うことを聞いてもらったこと。それと……

想いが湧いては溜まつていく。噴き出した想いが多すぎて、爆発してしまいそうだ。だから、言わなきや。

「——えっと、こちらこそ、ありがとう……ごさいます。その、あのお……楽しかった、です」

顔が熱い。本当に火が出そうだ。

こうして正面から誰かにお礼を言うのは、久しぶりかもしれない。どれだけ拙い言葉が出たのだろう。トリーさんは抱きしめたまま動かない。少しばかり不安が過ぎる。

だが、そんな想いも、俺を抱きしめる腕に力がこもることで中断される。

「ミナセちゃん、また一緒に遊ぼうね！」

その問いに答えるのは、気恥ずかしくかった。なんだが、顔が上げられない。本当に、恥ずかしい。

でも、今日は本当に——

「じゃあ、また一緒に動画撮ろう！」

——、

「動画は嫌です」

「即答!?!」

これさえ、なければなあ。

素直に、言えるのに。

第5話

「ミナちゃん、お昼ご飯の時間ですよー」

「……はあい」

トリーさんと動画を撮ってから、一週間が経った。俺が出た（尻尾だけ）動画は、そこそこ見られたらしい。コメントは『尻尾だけは草』とか『生殺しやんけ』というコメントが大半だったらしい。

なぜ「らしい」なのかというと、トリーさんとハヅキさんからの情報しか聞いていないからだ。

だって、恥ずかしい。コメントを見ないにしても、尻尾しか出ていないとはいえ、自分がでている動画なんてどう見ればいいのか。

というか、こんな情報を得られているのも、いつのまにか入れられていたSNSアプリのせいだ。帰ってきてゲームをしていると、いきなりトリーさんから連絡が来て飛び上がったしまった。

それからまあ、それなりに連絡はとっている。なぜか、スイーツの写真ばかり送られてきて、羨まし——うつとおしいと思うけど。一体、いつ入れたんだろう……

「それにしても、よく動画に出たわね。ミナちゃん、あんなに嫌がってたのに。なにか心変わりでもしたの?」

「いや、なし崩的に……」

「そうなの? それにしては楽しそうにしてたじゃない。紙の玉投げで。もしかして、ノリノリだった——痛い!」

うっさい。余計なことを言うハヅキさんには、尻尾で叩いておく。ノリノリだなんて、あるわけもない。

俺はいかにして動画に映らないかだけを考えて行動していたのだ。そんなことを考えている余裕なんてなかった。

あるとすれば……トリーさんに、乗せられたただけだ。それしか、考え、られない……

『……ありがとう。動画に出てくれて。おかげでとっても楽しかった』

「……っ！」

昼ご飯のカレーをかき込んで、水を流し込んだ。

「ミナちゃん？」

「は、はい!? 何ですか!?!」

「大丈夫? 尻尾がめちゃくちゃだよ?」

「大丈夫です!」

ああもう、変なことを考えてしまった。トリーさんが来てから、調子が狂うばかりだ。

別に変なこととはじやない。ただ、お礼を言われたただけだ。それがただ、なぜか妙に恥ずかしかっただけだ。何故かわからないけど!

「……ごちそうさまでした。ハツキさん、今日ってあと何かありませんっけ」

「うん、ないよ? ……あ」

「へ、何かあるんですか? なら早くしないと……」

そう言った、時だった。

「ミナセちゃん! 来たよっつ!」

聞いたことのある声。他でもない、そんな言葉とともに現れたのは、他でもない、トリーさんだった。

「な、なんでトリーさんが!?!」

「迎えに来たよ、じゃ、行こっか!」

「どこにですか!?!」

いきなり現れてなんだこの人! ええい、説明もなしにどこかへ連れて行こうとしないで!

「そうそう、トリーちゃんが来るって伝えるの忘れてたのよ」

「今言いますか!?!」

「じゃ、早速着替えてきましょうか。トリーちゃん、ちよっと待ってて

ね！」

「はーい！」

「俺の意見無視ですか!？」

なんかデジャヴ!

結局、徹底的に困いにかかる二人に敵うはずもなく……また俺は綺麗に磨かれてトリーさんに投げ渡されることになった。

アニマリアの研究はいいのだろうか。たしかに、暇だったけれども……!

「それで、なんで俺を連れ出したんですか」

俺とトリーさんは今、またあの道を歩いていた。今日は平日だからか、人の姿はまばらだ。その分、多少歩きやすくて助かった。

「また遊ぼうって言ったでしょ?」

「言っていましたけど……」

何か、社交辞令的なものだ……

まさか本当にまた遊ぶ……遊ぶ? ことになるとは思わなかった。なんだか、また振り回されることになる気がするけど。

「そういえば、私の動画見てくれた?」

「いえ、まったく……」

「えー、ミナセちゃんの動画とか評判良かったんだけどなー」

「そ、そうなんですか……」

そう答えたきり、無言で歩き続ける俺とトリーさん……

か、会話が續かないっ……!

二人で歩いているのに会話が續かないのはただけなのでは? ど、どうすれば……

「そ、そういえばトリーさん」

「うん、どうしたの?」

「なんで、トリーさんは動画投稿を始めたんですか？」

とりあえず、何も不思議じゃない程度に会話を試してみようと、前から気になってたことを聞いてみる。

一体、何を思ってた動画なんて始めたのか。それだけは、ちよつとだけ、聞いてみたかった。

「うーん、そうだなあ」

俺の問いを聞いたトリーさんは、考える素振りを見せて、「うん」と頷いた。

「やってみたかったからかな！」

「えっ……」

「やってみたかった。だからやった」といつ極めてシンプルな、予想してなかった答えに思わず声が漏れる。

「ほら、今流行ってるじゃない？　そういうの。レビューとかバーチャルとか、だからいつかやってみたいなーって思ってた。アニマリアになったから、ちよつといいって思ったんだ〜！」

「え、あの……それ以外の理由って」

「無いね！」

おう、ぼつさり。

なんとというか、すごいな。

そう楽しそうに語るトリーさんを見つめながら、思う。

怖くは、なかったんだろうか。

まだアニマリアが現れて、一年も経っていない。前例はあったとしても、まだアニマリアへの偏見は根強い。それなのに、何でただ「やりたい」だけで、こんなに行動できるんだろう。

「なんでそんな簡単に、やろうって思えるんですか？」

思えば、口から勝手に、そんな言葉が出ていた。

すると、トリーさんはきよとんとした顔を浮かべて、足を止める。

「まずい、地雷に触れた……!!」

「ご、ごめんなさい。無遠慮な質問してすいませんー！」

思いもしなかったトリーさんの反応に、反射的に謝罪する。ああ、失敗した……!!

「――後悔したくないから」

「……へ？」

「後悔したくないから、だよ」

そう言うトリーさんは、先ほどまでの顔をくるりと変えて、ニヤツとした笑顔を浮かべて、続けた。

「やりたいことをやらないなら、『後悔』しか残らないからね！だからやりたいことは我慢しないようにしてるの」

さも当然のように語るトリーさんは、すごく眩しくて。まるで純粋な子どものように笑うトリーさんを、直視できなかつた。

「だから、ミナセちゃんを誘ったわけだしね！」

「え、そこからどうしてそこにつながるんですか」

「あ、着いた着いた！ いらつしやくい！」

「話聞いてます?!? って……」

いつのまにか、トリーさんの家に着いていた。まさかとは思つたが、もう一度この家に来ることになるとは思っていなかつた。

「ただいま〜！」

そう言つて家に入っていくトリーさんをみて、思う。

「すごいなあ……」

俺には、無理だ。

やりたいからやる。それは、きつと言葉にするより難しいことで。それをしようと思えるだけ、きつとすごいことなんだろうな、と思う。少しだけ、羨ましいかもしれない。

「ミナセちゃん、早く〜！」

「は、はい！ お邪魔します！」

トリーさんに呼ばれたから、急いで家の門を潜る。それにしても、ここで一体何をするつもりなんだろう。動画撮影だったら逃げ……られる気がしない。

家に入った俺は、すぐさまリビングに通された。トリーさんは奥からお茶とコップを持って、俺に渡してくれた。

「いらつしやくい、ミナセちゃん」

「は、はい。どうも……それで、今日はなんで連れてきたんですか？」

「あれ、さつき遊ぼうって言ってなかったっけ？」

「……へ？」

「一緒に遊ぼうと思って、いろいろ用意したんだ」

「……あの、動画の撮影、とかではなく？」

「へ、撮りたいの？」

「ち、違います！」

まさか、本当に遊ぶだけとは。

内心でほっと一息。また動画に参加させられるかと思った。俺なんて参加しても、ろくなことにならなさそうだし、今日に至ってはただ遊びたいというのなら、まあよかった。

「じゃあ、ちよつと持ってくるね！」

「え、何をですか!?!」

「秘密」

えへへ、と笑ってその場を後にするトリーさん。それも、なぜか尻尾を振って。とんつ、とんつと軽い足取りでどこかへ向かっていく。

なんだか、嫌な予感がする。

今まで見たこともないトリーさんに、俺のナニカがそう告げていた。だけど、何をすることも想像がつかない。冷や汗を流しつつ、トリーさんを待つしかなかった。

「……さすがに、遅くない?」

——あれから、十分経ってもトリーさんは戻ってこなかった。

一体、何があったのだろうか。ミミをすましてみても、ゴソゴソという音がするくらいで、ほとんど物音がしない。それに、何か歩いている、という感じでもない。

……まさか、何があったのだろうか。

ちよつとだけ、心配になってきた。

下敷きになってもがいてるとかじゃないよね……? ?

探しに、行こうか。

人様の家を勝手に散策するのは気がひけるが、何か大ごとになるよりはマシかもしれない。でも、やっぱり人の家を勝手に……

「……ん？」

そう思っていた時、足音が聞こえてきた。どうやら、杞憂だったらしい。何事もなかったようでよかった。少しだけ安心した気持ちでお茶を口に含む。

トタ、トタつ、という音は、規則正しくリビングに向かっていった。そしてそれが、不意に止まって、リビングの扉が開かれた。なんの気無しに、トリーさんに目を向ける——が、止まる。

「……はい？」

そんな声が、自分の口から漏れた。いや、だって仕方がない。

だって、入ってきた人はトリーさんではなかったから。むしろ、見たこともない、知らない人で。いかなれば、アニマリアで……！

そんな彼女は、薄い黄色の尻尾を揺らし、同じ色のミミをピンッと立たせ、驚いたように震わせていて——

「……………誰？」

やっと口を開いた彼女は、ここにおいて当然、というように話しかけてきた。

「……………そっちこそ、誰ですか!？」

あまりにも不審者すぎる不審者に、俺も思わずそう叫んでいた。

第6話

「ということで！ ミナセちゃんに紹介しようと思って、ちいちゃんを——痛あ!?!」

あれからすぐ。トリーさんが後ろから現れ、紹介したいなどと言い出した。まさか、ずっと仕込んでいたのだろうか。というかどこから入ったんだらう。

「ちいちゃん、痛いっ!」

「痛いじゃないわ。あんたまたまた変なことやって、こんないかにも気弱そうな子にドッキリ染みた事しかけるもんじゃないわよ」

「き、気弱……」

初対面の人にもそう言われるのか……

当たってはいるものの、なんとなくシヨックだ。そんな俺を無視して、トリーさんと知らない人は会話を続ける。

「どうせ、あんたのことだから無理言っつて連れてきたんでしようけど。もうちよつと、自重しなさいよ」

「あ、あのー!」

「何かしら」

「えーつと、とりあえず、どちらさまで……」

「ああ、そうね」

こほん、と息を一つ。彼女は尻尾をふるりと動かした。その姿はなんとというか、不思議な魅力を持ってて、というか、圧力を持って……「私はチシヤ。まあ、見ての通り狐のアニマリア。それで、あんたは？」

「はい！ 俺はミナセです！ 見ての通り猫ですつ、よろしくお願ひしますっ!」

な、なんか思わず警戒したまま返事をしてしまった……! まずい、変に思われてないだらうか？

恐る恐る顔を上げる。

そこには、口元に手を当てて、こちらを見つめるチシャさんの姿があった。あれ……？ 一体、どうしたんだろうか。

「……………なるほど。トーリがかわいい、かわいいって言った意味がわかるわ」

「でしよ〜？」

「へっ!？」

いつのまにそんな会話が!? なんで人の情報を簡単に言うの、トーリさん!

そんな俺を置いて、チシャさんは俺をじーつと見つめていたと思うと、いきなり俺のミミを揉み始めた。突然すぎて、尻尾がぶわりと膨らんだ気がする。

「な、ななな何を!？」

「あんた、本当に男の子だったの? なんか弱々しすぎて、そう思えないんだけど……………あら？」

「なんで知ってるんですか!? とりあえず放しつ……………トーリさん!」

この人も距離感が近いっ。

ミミを揉まれながら、俺はどうすることもできなかつた。トーリさんを呼んでも微笑んでるし、心臓はバクバクしっぱなしで、落ち着く暇もない。

「……………まあいいわ。それで、トーリ。私とこの子呼んで、何しようとしてるの? また動画？」

「あ、違うよ……………よいしょっつと」

ようやく、ミミを放してくれたチシャさんの言葉に、トーリさんは紙袋を取り出した。それをどんと勢いよく机に置くと、その中から箱のようなものを取り出して、満面の笑みで言った。

「カラオケ、やろう!」

——カラオケ。

それは、仲のいい友だち同士で行ったり、恋人同士で行って、全力

でぶぎけたり、ラブソングを歌ったりするもので――

「ごめんなさい、無理ですっ……」

「即答っ!? しかもそんな悲痛に!？」

打ち上げの時、ずっと人の歌を聴きながら、ジュースを飲んでいた俺には無理だ……! そもそもなんでカラオケに……!!

「ミナセ、落ち着いて。そもそもなんでカラオケなのよ。別に、お店に行けばいいじゃない」

「あはは、実はカラオケセットずっと持ってたんだけど、使い道がなくて。折角だからちようどいいなくなっと思って思ったんだ。ミナセちゃんたちとちいちゃんを会わせたかつたし」

「でも、なんでカラオケを……あれ」

そこで、違和感に気づいた。

なんで、カラオケセットを紙袋から出したんだろう、と。

持っていたにしては、紙袋が綺麗すぎるし、それにホコリもかぶっていない。それも、未開封の証である箱の爪の部分もテープで閉じられていて、まったくの新品であると察せられた。

だったら、なんでわざわざ? なんて買ってきてまで、家でカラオケなんて……

「ほら、ミナセちゃん、外苦手だから。ちようどいいなって」

――あ。

たしかに、俺は外が苦手だ。それはトリーさんには今までの言動でバレているだろう。なら――

――もしかして、わざわざ買ってきてくれた?

そんな疑問が芽生える。それなら、あれが新品であることも納得できる。……いや、まさか。そんなことがあるはずがない。

まだ会ってそんなに経っていない。そんなほぼ初対面の人に、そん

な気を回す必要もないはずだ。本当にただ、綺麗な状態で保存していただけたら。自意識過剰にも程がある。そう、決めつけた。

「じゃ、繋いだから、早速歌っていき〜！」

「――」

リビングに、美しい歌声が響き渡る。

歌詞をなぞるだけではない、確かな。詞ことばの一つ一つに感情を込めて歌われるそれは、まさに歌手のよう。

歌に感情を込めるその人は、ミミと尻尾を音色に乗せて、指揮者のように空をなぞっていた。

「――♪」

そうして、彼女の歌は終わる。

歌を見事に表現し切った彼女は、どこか満足げだった。

――そして。

「やった！・ 96点だった！ 久しぶりのカラオケで！」

賑やかな音とともに採点が終わり、歌手――トリーさんは、尻尾をブンブンと振り回しながら高得点がとれた喜びを全身で表していた。なんとというか、台無しである。

当然、俺はタンバリンである。

無理です。歌うなんて。まともに歌ったことなんて、合唱コンクールくらい。しかも、まともに声を出したことなんてない。

そんな俺は、次々歌う二人についていけず……なんとというか、ものすごい疎外感に包まれていた。そもそも、タンバリンすらのタイミングでやればいいのかわからないのに。本格的に俺がいる意味がわからなくなってきた……

「おめでとう、とうかさつきからアニソンばかりじゃない。流行りの曲とか歌わないの？」

「カラオケって好きな曲を歌いたいからね。そう言うちいちゃんも流行り曲ばかりじゃん！」

疎外感を感じる俺を置き去りに、トリーさんとチシャさんは会話をしている。なんだか、悲しくなってきた。こんな時、どうすれば……

「じゃ、はい！」

「へ？」

そんな俺の手に、いきなり何かが渡される。視線を落とせば、ス
イッチが入った状態のマイク。

「次はミナセちゃんの番ね！」

「え、お、俺ですか!？」

いきなりバト^{マイク}ンを渡され困惑する俺に、トリーさんは「大丈夫大丈夫！」とサムズアップ。何も大丈夫じゃない！

「いや、俺歌なんて上手くないですし、歌ったことなんてもう3年くらいしてないし、そもそも俺の歌なんて聞いても得しなから、お
ミミを汚すだけですから！」

「私が聞きたいの！」

「そんなこと言われてもっ！」

あまりにも押ししてくるトリーさん。本当にどうすれば……

「……歌いなさいよ。ミナセ」

口を開いたのは、チシャさんだった。

思わず顔を見れば、縦に割れたその瞳は俺をまっすぐ見つめていた。あまりにもまっすぐすぎるその瞳に、体が強張ってしまう。

「歌ったほうがいいわよ、ミナセ。トリーは決めたら梃子でも動かさないから」

「ちいちゃん!?! 人を頑固ものみたいに！」

「事実でしょう」

そこには同意する。

まあ、トリーさんがいなければ、今ここにいないわけではあるけど。

「……………大丈夫、誰も笑わないわ」
「え……………」

その言葉は、その瞳と同じようにまっすぐで。心の奥底まで見通すような目に、身体が跳ねた。だけど不思議と、そんなに気にさせられ
てしまう。……………がんばって、みようか。

「歌ってみます」

選ぶのは、よく聞いたことのあるアーティストの曲。テンポは遅めで、比較的歌いやすかったはず。

久しぶりの歌で、正直どう歌っていいかなんてわからない。だけど、誰も、笑わないなら……………

「————♪」

歌い始めは、ゆっくりに。音量はできるだけ抑えて、伸ばすように歌いあげる。サビの部分は少しだけテンポは上がるから、息継ぎはしつかりとして。

「————↓」

最後のサビは力強くして、勢いよく歌い上げていく。不思議だ。さつきまで緊張してたのに、歌えば歌うほど、緊張が緩んでくる。ああ、歌うって、こんな感じだったなあ。

「————っ！」

————最後まで、歌い切った。

久しぶりすぎて、声がひどかった印象しかない。一体、どう——
「すごかったよ、ミナセちゃんっ！」

「わわっ!?!」

そんな余韻に浸る暇もなく、トリーさんに抱きつかれた。抱きついた時のいい匂いに、自然と顔が暑くなっていく。

「と、トリーさん……………」

「歌上手だったんだ！ びっくりした〜。見てよ、得点〜」

得点？

そう思つて、画面を横目に見る。そこには、『97点』と表示された採点画面が映っていた。

……あれ、自分で出したのだろうか？

自分の思っていた現実と違いすぎて、思わず呆けてしまった。

「ねっ、ちいちゃん！」

「……ええ、そうね。少なからず、トリーよりは」

「ちいちゃん!？」

「ち、チシャさ……」

「上手だったわ。ちよつとだけびつくりした」

……褒められて、いるのだろうか？

チシャさんの言葉は、どこかそっけない。だけど、どこか自分が誉められてるようで……なんだか、すごくムズムズする。身体中を羽で撫でられてるみたいだ。

歌を褒められるとか、初めてすぎて。俺の感情を、どう表せばいいのかわからない。う、うん。むず痒い。というか、すつごく恥ずかしい。

「え、えと……ありが、とう」

辛うじてそう言つて、身体を引き剥がすように、マイクをトリーさんに押し付けた。押し付けられたトリーさんは、不思議な笑顔を浮かべていた。その視線がまたむず痒くて、思わず顔を背けてしまう。

俺の顔は今、どうなっているのだろう。せめて、真っ赤になっていなければいいのに。

そう願う俺に、トリーさんは「よし！」と掛け声を一つして、マイクを構えていた。

「じゃあ、どんどん歌っていこうか——」

そう言つて、曲が流れ始めた時だった。

——トリーさんが、倒れたのは。

「トリーさん!？」

「トリーっ！」

声を荒げて、トリーさんに駆け寄った。いきなりすぎて何が起こったかわからないが、頭を打っては一大事だ。

俺より近かったチシャさんは、早速トリーさんの容態を確認していた。こういうのは手慣れているのだろうか。そして、トリーさんを一通り確認すると口を開く。

一体、何があったのか。緊張する俺に、チシャさんは言った。

「……ミナセ」

「は、はい」

「あの、信じられないかもしれないけど……寝てるわ」

「はい! ……………はい?」

「寝てるわ」

——、

えっ!?! 今!?!

くー、と寝息を立てるトリーさんを置き去りに、俺はそう思った。不思議なことに、チシャさんと思っていることは同じ……な気がした。

第7話

「完全に寝てるわね……」

「ええ……」

ぐー、という寝息を立てながらトリーさんに、俺とチシャさんはなんだかなんとも言えない表情を浮かべていた。

「そういえば徹夜って言ってたわ。体力をこの瞬間に使い切ったのね、多分」

「ええ、そんな子どもみたいな……」

「実際、寝てるもの」

いや、そうなんだけど。

微妙な気分で、寝ているトリーさんを見る。その顔は、本当にすやすやと眠っていて。なんとというか、起こすのも憚られる。

「それで、どうする？ 家主は寝ちゃったけど、これから」

「へっ？」

「帰るの？ 予定があるんだったらそうすればいいと思うし、トリーが起きるまで私がここににいるわ」

ああ、そういうことか。

……どうしようか。正直、一人で帰るのはまだ怖い。だからもうちょっと、ここにいさせてもらいたい、というのが本音だ。

……だけど、帰るの？ というのがさっさと帰って意味なのだろうか。だったら……さっさと、帰った方がいいのかもしれない。

「言っておくけど、とっとと帰って意味じゃないからね」

「は、はい！ すいません！」

読まれてたっ……！

「……あんた、わかりやすすぎるのよ」

「そ、そんなにわかりやすいですかね？」

「ええ。ちらっと見ればわかるくらいに」

「す、すいません……」

「なんで謝るのよ」

自分がそんなにわかりやすいとは思っておらず、チシャさんの指摘にもものすごく申し訳ない気分させられる。

そんな俺に、チシャさんは呆れたように笑っていた。なんだか、その視線がすごく生ぬるくて。思わず、顔を逸らしてしまった。なんで俺を見る人は、だいたい温かい目をするんだ。

「まったく、聞いてた通りね」

「へ、聞いてたって……ああ、トリーさんから……」

「そ。トリーから今日ここに呼ばれた時に、ミナセのことを聞いてたの。元男の子だけど、すつごくかわいい子って」

「へ、へー……」

かわいい子って。元が着くが男であった俺にはなんだかすごく、複雑な気分だ。

「実際見てみたら、気弱そうだし恥ずかしがり屋って、たしかに、変な愛らしさはあるかもね」

褒められて、いるのだろうか？

チシャさんの言葉は妙にまっすぐくる分、言葉の裏がわかりにくい。元男としては、愛らしいとか言われても、どんな反応をすればいいか困ってしまうのだけれど。

「また困ったって感じね」

「うぐっ……」

「それで、どうするっ？」

「……せめて、起きるまで待っています。寝ているうちに帰るのは失礼な気がして」

「ふふ、そう」

チシャさんは口元に手をあてて笑うと、自分と俺のコップにお茶を注いで、渡してくれた。

「じゃあ、待ってましようか」

「は、はいー」

とは言ったものの……

チシャさんは、さつきからスマホをのぞいている。さつきから操作はしていないから、多分動画でも見ているんだろう。

対する俺は、真っ暗な画面を触っているふりをしながら、周囲を伺っていた。まあ、とどのつまり。

空気が、重いっ……！

まさか、たった一人寝ただけでこれほど空気が重い感じになるとは思わなかった……！ チシャさんは、時たまトーリさんを見るだけで、俺には目を合わせようとはしていない。それは気を使われているのか、それとも面倒くさいだけか……なんだか、今日は悩んでばかりな気がする。お茶を飲んで、ため息を吐いた。

「……あのさ」

「っ!? は、はいっ!」

「ミナセ、わかりやすすぎ。さつきからミミと尻尾が動きつばなしよ?」

「す、すいませっ」

「謝らないの、別に叱ろうってわけじゃないんだから」

そう言うなりチシャさんは、スマホを置いて、俺の顔をいきなりつかんで覗き込まれる。

チシャさんの縦割れした瞳に、どこか居心地が悪くて目を逸らしてしまう。そんな俺に構わず、チシャさんは続ける。

「本当にバレバレよ。あんた」

「そ、それでなんで俺の顔をつかむんですか……?」

「ああ、気にしないで。かわいくてつい」

「かわいいって言えばいいと思ったりします!」

なんだか、前にも同じことを叫んだ気がする。と、そこでチシャさんに、ある疑問が浮かんだ。

「あ、あのー」

「何かしら」

「えっと……チシャさんって、動画に出てたんですね」

視線を外しながら、そう聞いてみる。

そう、たしかそうだったはずだ。俺が見た動画……たった一本だけだけど、“ちいちゃん”と呼ばれていた人がいた。トリーさんがチシャさんをちいちゃんと呼んでいたから、多分、そうなんだろうとは思うけど」

「うん、出たわよ。何回か」

「だったら……どうやって、トリーさんに会ったんですか？」

それが、気になっていた。

トリーさんはどこからか情報を見つけて、俺の居場所を見つけてきた。俺は研究棟に入った、ということはニュースで見られただろう。でも、チシャさんは普通に暮らしているはずだ。研究棟の中でも見たことがないし。まあ、俺が外に出なかつたことが原因だろうけど。「ああ、そうね……私、アニマリアになつたのって、二ヶ月くらい前なの」

「二ヶ月前……」

ということは、俺が研究棟に入ってから、一ヶ月後くらい、か。

「まあ、アニマリアになつても生活が変わるわけでもないし……検査とかいろいろ受けた後で、また学校に通つてたの」

「は、はあ」

「でね、学校の帰り道に、トリーがいきなり現れて、『私、トリーって言います！ 会いにきましたっ！』って言われたの。本当、やりたいことに関する嗅覚はすごいわ、トリーは」

「は、は………はあ？」

えっ、何それ。俺とほとんど同じだ。

というかトリーさん、会つてすぐそれは不審者すぎるのでは……

そもそもどうやってチシャさん突き止めたんだ。あの人の嗅覚、どうなってるんだろう。

「それで動画に誘われて、最初は断つただけ……まあ、いろいろあつて動画に出ることになったのよ」

「……ちなみに、いろいろって何ですか？」

「……いろいろ」よ。私にだって、葛藤はあるもの」

そう言つて、自分の尻尾を撫でるチシャさん。その顔はなんていう

か、少し恥じらっているようだった。

なんというか、意外だ。チシャさんは見た感じだと、悩みとかほとんど無さそうだったのに。

「今、悩みとか無さそうって思ったでしょ」

「えっ!? は、はい……すいません……」

「……ふふっ」

バレて慌てる俺を、愉快そうに笑うチシャさん。なんというか、バカにされてる気がする。

そんな俺の心を察せられたようで、「ごめんごめん」と謝るチシャさん。

「とにかく、私もトリーに誘われた口よ。結局、楽しんじゃってるしね」

そう言うとおもむろにトリーさんの額に指を添え、パチンっという音を鳴らした。

何してんの!? と思ったものの、うめき声を漏らしただけで全然起きる気配もない。

「ところで、ミナセはなんで動画でたの? 出たがる性格でもないでしょうに」

「え、あ、それは……トリーさんに、半ば無理やり」

「へ〜……半ば、ね」

なんだろう、墓穴掘った気がする。

なぜか瞳をキラリと、雰囲気の変わったチシャさんに悪寒を感じて身体が強張った。

「ミナセ、あんたトリーのこと好きなの?」

「——は」

——、

「はあ!? な、なんっ!」

「はいはい、落ち着いて。こぼれるから」

握り込んでいたコップを落としかけ、慌てて持ち直す。

こぼれるからって、驚かしたのはあなたでしょうに。そんな思いを込めて視線を送れば、チシャさんは「ごめんごめん」と反省していかのようには笑っていた。

「だって、『半ば』なんでしょう?」

「そ、それは言葉の綾で! これ以上断つても無駄だなんて思っただけですよ!」

「別に元男の子なら、それでも不思議じゃないと思うけど」

「なんでそんな前提なんですか! そもそも、会ってまだ一週間ですよ?! そんなすぐに……ああもう、ともかく違いますよ!」

「『そう思うわけない』という言葉は飲み込んだ。なんだか、そう言ったとしても一目惚れと片付けられる気がして。」

「ふーん、そう? でも、嫌いじゃないんでしょう?」

「それは——」

——どう、なんだろうか。

嫌い……では、ないんだと思う。でもまた別かと言われると正直、微妙だ。

友だち、ではないと思う。まだ会って短いし、トリーさんのことを全く知らない。そう思い込めば傷つくのは自分だ。だから違う……そう、思う。

というか、トリーさんと会ってから調子を狂わされてばかりだ。もう出たくないと思っていたのに、こんなすぐ連れ出されて。やりたくないって思ってもさせられて。振り回されてばかりいる。

でも、どこかそれが少しだけ。本当に、ちよつとだけ。

「——楽しかった、とは……思ってます」

頭がぐるぐるして、恥ずかしい思いをして、調子が狂わされてばかり。だけど、どこか楽しい……と、そう、思っているのは事実だ。本当にちよつとだけだけど!

「……そう」

俺の言葉に、チシャさんはふわりと笑った。それはどこか、安心したような……なんというか、穏やかな笑顔だった。

そんな目を向けられる理由がわからず、困惑してしまう。こんな時、どうすればいいのかわからなくて、水を飲んで誤魔化した……その時だった。

「じゃ、そろそろね」

「へっ？」

そんな一言ともに、チシャさんは容赦なく、トリーさんの額に手刀を決めた。そんな一撃を決められたトリーさんは、「きやうんっ!？」という悲鳴をあげて飛び起きた。

「おはよう、トリー」

「おはようちいちゃん……じゃないよ！ けほっ、なんでそんな乱暴に起こすの〜!」

「30分くらい寝たんだもの、そろそろ起きなきゃ健康に悪いわ」

「真つ当な理由つけてチョップを正当化しないでっ」

寝ぼけ眼で抗議するトリーさん。それをさらっといなすチシャさん。なんだか、トリーさんが起きただけで、こんなにも空気が変わるとは思っていなくて。

「……ははっ」

そんな変わり果てた空気に、思わず笑ってしまった。抗議し続けるトリーさんがうるさくて、笑い声は聞こえなかったと思う。それが、俺を無視されているみたいで。だからちよつと腹いせに。

——今日も、ちよつとだけ楽しかった。

そんな気持ちは、言わないことにした。

第8話

「ミナちやくん、準備できてる〜?」

「はい、もう少しですー!」

早朝。

気の抜けたハヅキさんの言葉に返しながら、検査服に腕を通した。今日は検査の日だ。とは言っても、やることは普段と変わらないのだけれど。

ほぼ毎日受けてはいるものの……いや、最近トリーさんに振り回されて……それは置いておくとして。なんというか、検査するときには微妙に緊張して、未だに慣れない感じがする、というのが本音だ。

「できました〜……あれ、ハヅキさん?」

着替えるなり、洗面所を出る。しかし、そこにはハヅキさんはいなかった。

多分、ドアを開ける音が聞こえてたから外に出ていたんだろう。……できたと聞いておきながら、なんでいないんだろう。まあ、いいか。

別に先に検査室に行ってもよかったけれど、ハヅキさんと入れ違いになってもなーと、部屋で待つことにして、ベッドに倒れ込んだ。

起きたばかりでまだ暖かいベッドは、着替えたばかりなのに、不思議と眠くなる感じがした。

なんだか、こんなにのびのびするのは久しぶりな気がする。

……最近は特に。という思いは飲み込んで、寝転んだままぐぐつと身体を伸ばす。

トリーさんに振り回されるようになって。ついでにチシャさんとも出会って、なんだかとても忙しかった気がする。

「……ん?」

その時、扉の外から足音が聞こえてきた。どうやら、ハヅキさんが帰ってきたらしい。起き上がるのもなんだか億劫で。……ハヅキさんだったら、寝てることも見られてるから、いっか。

そう思つて、完全にだらけきつたまま。ハヅキさんを待つ。そうしてその足音は部屋の前で止まって、扉が開かれる――

「おはよー！ 来たよー！」

……現れたのは、ハヅキさんではなかった。

扉を開いてニッコニコなその人は、明らかにトリーさんで。ミミをびびこぴこ。尻尾をパタパタ。朝から元気な姿を見せつけるトリーさんの視線は、俺に向いていて――

「……お邪魔だった？」

「――っ!？」

驚愕、羞恥心。いろんな感情がごちゃ混ぜになって、声なき悲鳴をあげて勢いよく飛び上がった。

「な、なんでトリーさんがっ……!？」

なんとか取り繕えないだろうか。

そう思つてベッドに座り直し、落ち着いて言葉を出そうとするも、口からは慌てた言葉が滑り出てしまう。当然、そんなんじや誤魔化せるはずもなく。

「……な、何も見てないよ？」

「そんな気を使って嘘つかないでくださいっ!？」

当然、しつかりと見られていたからバレているわけで。下手な嘘をつかれたせいで、より恥ずかしい想いをしただけだった。

「そ、それよりも、なんでトリーさんがここに？」

恥ずかしさを紛らわすように、トリーさんに聞いてみる。どうせなら、考えてる間にいろいろ隠せないか、とも思つて。

たしかここは、ある程度許可がなければ来られなかったはずだ。

……そんなほいほいと、俺に会いにくるわけもないし。

「……うんっ!？」

しかし、トリーさんはまるで理解できていないような、そんな声を

あげた。

「え、えつと、どうしたんですか？」

「ミナセちゃんが呼んだんじゃないの？」

「……………へっ？」

予想していなかったまさかの言葉に、間拔けな声をあげてしまおう。まさか、俺が呼ぶなんてあるわけがない。俺にトリーさんを呼ぶ度胸なんてあるわけないし……………

「どういふこと……………」

思わずそう呟いた時、部屋の扉が開く音がした。

「おはよう、トリーちゃん」

現れたのは、ハヅキさんだった。

だけど、なぜかその声は妙な威圧感を持っていて。謎の迫力に、さっきまで考えていたことがどうでもよくなっていく気がした。

「お、おはようございます？」

それはトリーさんも感じ取っているようで、珍しくも萎縮したように返すトリーさん。

「ええ、おはよう。じゃあ、トリーちゃんも準備しよっか」

「え、な、なんの……………」

「何って……………健康診断」

瞬間、トリーさんの動きは早かった。

目の前から姿が消えたかと思うと、俺の背中に衝撃が。見れば、トリーさんは俺を盾に身体を小さくさせていた。

「ちよ、トリーさん!？」

「ミナセちゃん、私って健康だよね!？」

「いきなりどうしたんですか！ 何、が……………」

そこで、気づく。トリーさんが、怯えている……………？

ミミは後ろに倒れ、尻尾は垂れ下がって、どこか体が震えていて……………本当に、この人はトリーさんなのだろうか。さっきまでの元気さなどかけらもない。

「トリーちゃん、検査しなきゃ健康とかわからないでしょう?」

「私は健康ですつ、ミナセちゃんもお願いいつ!」

「え、ええと……」

トリーさんにそうお願いされるものの、俺はそれどころではない。距離が近いせいで、柔らかいトリーさんの身体と触れ合つて緊張しっぱなしだし、いつもと違う様子に変な気分になるし、何より……

「私は健康だからあ……」

トリーさんが涙目ですがつてくるせいで、全然落ち着けないし……

!

「仕方ないわね。じゃあ、こうするわ」

「へっ……っ」

困惑して固まっている俺を置いて、ハヅキさんは扉を開けて誰かに合図する。すると、担架をもってどこからか現れる白衣の人たち。

まるでいじめられたこいぬのように震えるトリーさんをなんのこともなく担架に乗せてしまった。ご丁寧に、逃げられないよう囲つて。

「た、たすけてえ……」

伸ばされた手は空を切つて、そのまま運ばれていくトリーさん。あげられたままの手が哀愁を誘う。

そうして、部屋には静寂が残された。

「じゃあ、ミナセちゃんも行こっか」

「は、はい……」

なんとというか、別に。検査は嫌ではない、のだけれど……

怯えきつたこいぬのような鳴き声をあげていたトリーさんを思い出して、なんとなく。

今日、大丈夫かな……?」

そう、思わずにはいられなかった。

「くすん、くすん……」

「あのー、トリーさん。大丈夫ですか？」

あれからもうお昼。一通り検査を終えて、休憩の時間。俺は何事もなく終わったけれど、トリーさんはもうひどいことになっていた。

検査着に着替えたはいいものの、ミミは倒れっぱなし、尻尾はへたれっぱなし。検査中もずっとうめき声みたいなのが聞こえてきて、今はすすり泣いてしまっている。朝の元気さなんて見る影もない。

「それにしてもトリーさん、病院苦手だったんですね」

「うっ……」

凶星だったようだ。ミミをピンつと立てたあと、すぐにへんによりしてしまった。なんというか、本当に意外だ。

「病院は嫌なの〜」

そう言っただけでくされてるトリーさんは、いつも俺を連れ回す人と同一人物とはとても思えない。

そもそも、なんで病院が嫌いなのだろう。検査なんてそうそう苦手になるものなんて……

と、そこで思う。いや、まさか……

「……もしかして、注射が嫌だったりしますか？」

「っ!? そ、それはっ!」

俺の言葉に、トリーさんがガバツと起き上がった。だけど続きの言葉は出てこず、口をパクパクと、どう言えばいいかわからないように固まっただけ。その顔は、今まで見たことないくらい真っ赤で……

「ほ、本当に注射嫌いなんですか？」

「う、くう……」

それはまた、なんともまあ。

そんな病院嫌いな子どもみたいなのをトリーさんが言うとは。

「注射のどこが怖いんですか。別にずっと刺してるわけじゃないでしょう?」

「針でしょ!?! そんなの身体に刺すっておかしいよっ」

……筋金入りだなあ。

散々検査されて心が折れているらしい。これはもう、落ち着くまで待った方がいいかな。

そんな時、扉が開く音がして、お茶やお菓子を台車に乗せたハツキさんが入ってきた。

「は〜い、お疲れさま！ お菓子持ってきたよ〜」

朗らかなハツキさんの言葉と同時に、トリーさんの身体が強張った。警戒しすぎではないだろうか。

「トリーちゃん、別にそこまでカチカチにならなくても……」

「だ、だってえ……」

「注射はもうないから、力抜こうね〜」

はいはい、と肩をぽんぽんとされるトリーさん。なんか、思いつきり子ども扱いされてない？

「はい、ミナちゃん」

「ありがとうございます……」

「トリーちゃんも」

「これ、薬とかじゃ……」

「普通のお茶よ、お菓子と一緒に薬出すわけないでしょう」

……本当に、トリーさん？

なんだか、さつきからミミも尻尾も元気ないし……調子が狂ってしまふ。でも、怖いといっているから、仕方がないのかもしれない。むむ……

「ほら、トリーちゃんがそんなだから、ミナちゃん困惑してるじゃない」

「そんなこと言ったってえ……」

「ほら、まだ午後の検査があるんだから、今のうちに食べちゃいなさい」

「まだあるのっ!？」

「んぐっ!？」

トリーさんの反応に、思わずむせてしまった。あのトリーさんが、検査一つでここまでぼろぼろになるとは思わず……

「けほっ、えほっ……ぐ、ぐごめんなさっ」

お茶が変なところに入ってしまった。さすがに、変に思われて……そう考えて、顔を上げると……なぜか、ハヅキさんが微笑ましいものを見るように笑っていた。

「な、なんですかハヅキさん……」

「いや、何も……」

聞いても、ハヅキさんは煙に巻くようにはぐらかされてしまった。そんなハヅキさんにどこか、身体がむず痒い感覚がして……ええい、なんでそんな顔をするんだ。

「あの、本当に……」

「じゃ、トリーちゃん。先に終わらせちゃおっか」

「え」

「ハヅキさん!? ま、待つてええーっ!」

俺の疑問に答えることなく、ハヅキさんはトリーさんを引っ掴んでその場から消えてしまった。一人残された俺は、ただその後ろ姿を眺めるしかできず……

ことの顛末を語れば、帰ってきたトリーさんはずっと涙目だったと言っておく。

それにしても……なんで、あんな顔をされたんだろうか?

第9話

「……ふ、あ」

晴れの日。緩く流れる雲を見ながら、気の抜けたあくびが漏れ出ていった。朝からの仕事も終わって、ちようど暇な時間。ベッドの魔力に加えて、陽の強さもほどよく、不思議と眠くなってしまった。

とどのつまり、俺はいわゆる……日向ぼっこをしていた。アニマリアになってから、なんとなく日向にいると落ち着くような感じがして、こうしていることが増えた気がする。

……このまま、寝てしまおうか。

そんな想いがよぎって、身体のを抜いて……

「なんでまだ、検査しないといけないのー!?!」

……泣きついてきたトリーさんに、受け止められた。

背をどつかれて、さっきまでの微妙な眠気はどこへやら。椅子に座ったまま器用に泣きつき、腕をくすぐる尻尾の感覚を覚えながら、とりあえず慰めておこうと口を開く。

「……トリーさん、仕方ないと思いますよ。どれだけ検査行ってなかったんですか」

「だってえ……」

そう弱々しく言うトリーさんに、もう見慣れたものか、と割り切つて話す。

トリーさんがまた来ている理由……というのも、ただ単純にサボりすぎただけである。本来なら最初に数日に分けて受ける検査を1日目ですっぽかしてそれから行ってなかったら……それはまあ、一気に終わらせるしかないだろう。幸い、最近はちゃんと来てくれるようになったらしいけれど。

「あとは視力とか測るだけなんですし、そこまで怯える必要もないで

しよう?」

「……………がんばる」

……覚悟まで時間かかったな。ということは言わないでおくことにする。嫌なことは、慣れるまで時間がかかるもの。簡単に強制していいものでも……

「……………? どうしたの、ミナセちゃん」

「——、」

いるな、強制してくるヒト。

「……………いえ、トリーさんだなあつて思つて」

「どういう意味?!? ……きやつ!」

「……………にやつ?!?」

その瞬間、俺の視界が塞がれた。

叫んだトリーさんが、いきなり身を起こした結果、トリーさんのミミが目を塞いだと気づいて、反射的にのけぞつた。多少勢いよく動いたせいで、俺の身体が傾いてしまった。そうなれば、椅子に座つたまま俺に体重をかけていたトリーさんも、バランスを崩すわけ——

——俺にトリーさんが覆い被さる形で、倒れてしまった。

「~~~~つ!?!」

「ご、ごめんっ!」

トリーさんの言葉を聞いている余裕などなかった。薄い検査着のせいでほぼダイレクトに感じる柔らかさ。さつきまで本気で嫌がっていたのか、少しだけ潤んだ瞳に身体が硬直する。

「と、トリーさ……………」

「あ、足が椅子に絡まって……………」

「どんな倒れ方したんですかっ」

椅子をどうにかしようともぞもぞと動くせいで、より感触が伝わってくるせいで、さらに頭がぐちゃぐちゃになる。一体、どうすれば——

「——失礼します。こちらで……………んっ!」

「——え」

そう響いたのは、誰の声だったのだろう。

ガラリと扉を開け、不意に現れた人物。トリーさんの検査、というなら。休憩に入ったばかりだからそれはない、はず。

入ってきた人物は、アニマリア専用の検査着を身につけ、稲穂のようなミミと尻尾を携えた——

「ち、チシャさん……」

紛うことなき、チシャさんだった。

チシャさんは、俺とトリーさんをじっと見つめたまま固まっていた。それから、何かを思いついたように頷いて……

「ごめん、間違えた」

そう言つて、扉を閉め——ちよっ!?

「チシャさんっ! 一体何を間違えたんですかっ、ちよっと待って……!」

「ミナセちゃん! 足がまだ……」

「まだ絡まつてるんですか!?! あ、あぁっ!」

「あんだ、ここに住んでたのね」

「は、はい……」

あれから数分、やっと元の体勢に戻れてチシャさん呼びに……止めに行けた。なんというか、とても疲れた気がする。

「というかチシャさんは、なんでここに?」

「私も検査よ。休憩ってなって、ミナセとトリーも居るって言われてここにきたら……まあ、まずいタイミングで入っちゃったなってこと」

「そ、そうですか。ちなみに、案内した人って……」

「えーっと、確か……ハヅキって書かれてたわね」

——ハヅキさんっ！　せめて説明して！

内心で絶叫してしまった。多分、顔は引き攣ってると思う。というか、なんでここに案内するんですか！

「それにしても、よく作ったわね。こんなところに全部完備の部屋なんて」

「ま、まあ。特別に用意してもらってますし——」

「ミナセちゃん！　ちいちゃん！　ゲームやらない!？」

突然、トリーさんの声が聞こえて、話は中断されてしまった。何事かと思つて顔を向ければ、そこには紙袋を片手にキラキラした笑顔で、尻尾を振つたトリーさんが立っていて——

「立ち直りはや……」

そんなボソツとつぶやいたチシャさんの声が聞こえて、こっさり同意した。

トリーさんは、先ほど今日の検査を終えたばかり。それまでずっと尻尾もたらりとミミもしなびていた姿など見る影もなく、この前の元気を取り戻したトリーさんは、全力で遊ぼうとしていた。

……なんというか、安心するなあ。

「ゲームって、何するのよ」

「ゲーム機、持つて来てるよ。テレビあるのは聞いてたからね」

「なんで、こんな時ばかり準備がいいのかしら……」

ゲーム機を片手に笑うトリーさんに、呆れたような顔をするチシャさん。なんだか、二人の関係が見える気がする。

「ミナセちゃん、テレビ借りていい……って、どこにあるの?」

「あ、ああ。今出します」

……まあ、別に隠すものでもないし。それになんだか、楽しそうにしてるトリーさんの邪魔をするのも悪いし。ということで、俺はテレ

ビのカバーを外……リモコン、どこにあるんだっけ。

「えっと、すみません。繋いだことないので、あとはお願いします」
「は〜い！」

俺がそう言うと、トリーさんはてきぱきとゲーム機を接続しはじめた。このテレビは初めて使うから、勝手がわからないけど、トリーさんに任せておけば安心だろう。

そう思っただけで座っていると、チシャさんが物珍しそうな目でトリーさんを見つめていた。

「……チシャさん、どうしたんですか？」

「いや、トリーがあんなにはしゃいでるのは、珍しいなと思って」

――、

「……いつも、あんな感じでは？」

「ふふっ、確かにね。私、トリーと付き合い短いけど、あんなはしゃいでるのは見たことないわよ？」

「そう……なんですか？」

「ええ。あんたほどじゃないけど、トリーもわかりやすいのよ。本当、――」

最後の言葉は言葉になっただけで、聞こえなかった。聞かせるつもりもなかったらしいチシャさんは、俺の横で尻尾を撫で始めた。

――チシャさんの目には、どう見えたのだろうか。

ほんのちよつとだけ、気になったけど。でもそれが、悪い意味ではない。そう思えたから、気にしていないふりをした。

「ってなんで俺の尻尾を触ってるんですか！」

「ちようど良かったから、つい。他人ヒトの尻尾ってなかなか触る機会ないのよねえ」

ま、マイペースな……

「二人とも、できたよ〜」

そうしているうちに、接続が終わったらしい。とつくにゲームが起動されていて、レースゲームの画面が映し出されていた。

「早くやろー!」

そう笑って、コントローラーを渡してくるトリーさん。それを受け取り、チシャさんに渡しておく。

あのゲーム機についていたコントローラーは二人分だったはずだ。なら、俺なんかよりもチシャさんとやってもらった方がいいだろう。そう思った。俺は、二人のゲームを見せてもらうだけに――

「はい、ミナセちゃん!」

「――へ?」

そんな声と共に渡されたのは、二つめのコントローラーだった。一瞬、渡されたことに気づかず、思考が停止してしまった。ちよ――!

「と、トリーさん。俺は……」

「一緒にやろー! 余分に持ってきてたんだ〜!」

トリーさんの手には、三つめのコントローラーがあつて。笑顔で渡されたそれに、俺は返す言葉に困って……

「……じゃあ、やります」

そう、無愛想に返すしかできなかった。もう少し言葉を選べた気がするけど、そう返すのが精一杯だった。

「操作わかるよね?」

「さ、さすがにわかりますって。俺のことなんだと思ってるんですか」「これ、触るの初めてなのよね。今までのと同じでいいのよね?」

「チシャちゃん!」

そんな軽く話しながら、懐かしい音と共にゲームが始まる。久しぶりだけど……せつかくだから、楽しむことにしようか。

「――やった〜! また一位!」

あれから30分ほど。何度かゲームをしたけれど、トリーさんがめちゃくちゃ強かった。さすが動画投稿者。意外とハイスペックなんだなあ、と実感させられた。

俺は二位か三位くらいは取れたものの、だいたいトリーさんに一位をかつさらわれてしまった。

意外だったのはチシャさんだ。操作はできていたものの、なぜか落下に落下を重ねて……なんというか、最下位あたりをうろろうろしていた。

……なんだか、個人的に悔しい感じがする。

「トリーさん、どれだけやり込んだんですか……ねえ、チシャさん」

「——」

「……？ チシャさん？」

ちよつとだけ悔しい気分を晴らそうと、チシャさんに話しかける。だけど、言葉が返ってこなくて——そう思ったその時だった。

「チシャちゃんくん、検査再開するよ」

「ああ、ハヅキさん……」

「こんにちは、ミナちゃん。楽しかった？」

どうやら、チシャさんの休憩が終わったらしい。ガラリと扉を開け、ハヅキさんが現れた。まあ、チシャさんのことだし、トリーさんのように時間はかからないだろう。

「——まだ」

「どうしたんですか、チシャさ——」

「まだやる」

「——へっ!？」

チシャさんから出たまさかの一言に、変な声が出てしまった。というか、ハヅキさんが迎えに来てるんですけど!?

「次は勝つ。トリー、早く次のレース」

「え、えええ。ちいちゃん、ハヅキさん来てるよ。行ってきた方が……」

「このまま終われない。もう一回」

「あ、あらあゝ……」

まさかの負けず嫌い!?

予期していなかったチシヤさんの一面に、少しばかり驚いてしま
う。というかそんな子どもっぽいチシヤさんを見れるとは……

「チシヤちゃん、検査はすぐ終わるから、検査が終わってからでも
……」

「そ、そうだよちいちゃん。いつでもできるから……」

「やらせてほしい」

むすつとしたまま続けようとするチシヤさんに、二人で止めにか
かって、それをすげなく断られる。なんというか、検査をしに来たは
ずなのに、ゲームが本命になってしまったチシヤさんに、少しだけ微
笑ましく思ってしまった。

……俺が加わっても、止められるだろうか。

何故だか、いくらやっても止められなさそうなチシヤさんの様子を
みて。とりあえず、心の中で合掌しておいた。

第10話

「よし、こんなもんかな」

一日の仕事も終わり、時間を持て余していた頃。俺はモップを片手に息を吐いた。まあ、ただ掃除をしていただけなのだけれど。

俺の使っている部屋は普段も掃除してるし、私物も少なかつたからあまり汚れてはいない。だけど、最近トリーさんが来るようになったから、とりあえずやっておかなければどう思われるかわからない……ということ、改めて綺麗にしておくことにしたわけで。

「ミナちゃん、終わった？」

「ああ、ハヅキさん。はい、終わりましたよ。何か変なところとかありません？」

「ううん、ないよ」

モップを片付けていると、ハヅキさんがやってきた。掃除をし始めたのも、ハヅキさんが言ったからである。それにしても……

「ハヅキさん、どこに行ってたんですか？」

ハヅキさんは、俺に「掃除しよう！」と言ったきり、嵐のようどこかへ行ってしまった。自分が使っている部屋だから俺がやるのは当然として、普段から掃除してるのに、わざわざ指示されたうえ、出かけてしまったのだろう。

「ああ、そうそう……じゃんっ！」

そう言つて、少しばかり勿体ぶつて、両腕を上げる。その両腕には、大きく膨らんだレジ袋がぶら下がっていて……

「お菓子作り、しよつか！」

「なんでこうなっただんですか……?」

目の前に広がるのは、生クリーム、小麦粉、砂糖といったお菓子作りに欠かせない材料たちが広げられたキッチン。正直、これからお菓子を作るといふイベントに、ちよつとだけ嬉しい感じはするものの、困惑が大きいというのが本音だ。

「せっかくキッチン付けてるもの、使わなきゃね。ちゃんと掃除もしておいたから、すぐに使えるわよ」

「一体いつのまに……」

「ミナちゃんが寝てる間に、ちよちよいと。ミナちゃんつて、意外と起きるの遅いもの」

「うぐっ……」

確かに、スマホゲームとかで夜更かしして寝るのは遅くて、眠いんだけどさあ……

「そ、そうじゃなくて! なんでお菓子作りなんですかっ」

「ミナちゃん、お菓子好きでしょ?」

「——え」

「たまーにケーキとか出してあげると、目に見えて瞳がキラキラしてるし、尻尾とミミも忙しないから」

「なっ……!?! ぐっっ!」

そんなハツキさんの言葉に、言葉にならない叫びをこぼしながら、顔が真っ赤になってしまう。まさか、気づかれて……っ!

「それに今も、材料見て尻尾——」

「わかりましたっ! わかりましたからっ、作ります! 作りますよっ!」

真っ赤になっただ顔を隠すように、顔を伏せた。ああもう、普通に気づかれたならあんまり気にならないのに、尻尾とミミで気づかれたっていうのが、本当に恥ずかしい。

「それで! 何を作るんですか!?!」

「誤魔化したわね……痛い!」

「いいから何を作るんですか!」

余計なことをいうハツキさんを尻尾で叩いて、調理台を叩く。ダ

ンっという割と大きい音に、ハヅキさんは「ごめんごめん」と笑っていた。本当にわかつているのだろうか。

「えっとね、ケーキ作ろうかと思つて」

「ケーキ……ですか？」

「そうそう、ちよつと簡単にしたやつね。ホットケーキを重ねるだけなんだけど」

「へ、へえー……」

おお……なんか、少しだけ楽しみになつて……はっ！

ハヅキさんに気づかれる前に、慌てて手を後ろに回し、尻尾の根本を押さえておく。さすがに同じ轍は踏まないようにしなければ。……抑えられる気はしないけど。

「じゃあ、早速作りましょうか」

「は、はいっ……」

久しぶりに見る大量の甘いものたちに、ちよつとだけワクワクしながら、材料を手にとつた。微笑ましそうな顔をするハヅキさんに隠すように、せめてこんな気持ちがあればいいように……なんて思った。

「うーん……」

今やっているのは、生地作りだ。モトをフライパンに垂らして、つぶさないように形を整えておく。あまり見た目には頓着しない方だけど、できるなら綺麗にしておきたい。重ねるらしいし。うわっ、生地がフライ返しに……修正しないと。

正直、焼いてる時点でいい匂いがしたホットケーキに、少しだけ気分が浮き立っていた。お菓子作りは簡単なものしか作つてこなかったから、手の込んだものを作るドキドキ感がある。生クリームはどうしようか、果物もたくさんあったし、配分も考えないと――

「――ナちゃん。ミナちゃん、どう？ いい感じになつてる？」

「――はいっ!？」

うおう、びっくりした。

「ミナちゃん、聞こえてる?」

「は、はい! なんですか!」

「どうやら、夢中になりすぎていたらしい。ハツキさんの呼びかけが全然聞こえてなかった。」

「お、いい感じに焼けてるね。あと二枚くらいやこつか」

「け、結構焼くんですね」

「まあね。なかなか作る機会もないだろうし、焼ききつちやおうと思ってる」

「そう笑いながら、ハツキさんはフルーツをカットしていた。手元を見ないでイチゴを切る姿は、本当に手慣れているようで……なんだか、負けた気がする。」

「……手慣れてますね。やっぱり、兄弟が多いと作ったりする機会が多いんですか?」

「えっ、あ、うん。大変なのよ。量も作らないといけないしね」

「そう言いながら、ハツキさんはイチゴの薄切りを完成させながら、バナナを手に取り出した。やはり家族が多いとそういうものなのだろう。あんまり苦労したことは……あ、と。俺もちゃんとやらなきゃ。」

「そういえば」

「? はい」

「最近、どう?」

「……いつも——ほとんど自室こじにいるのに、何故聞く必要が?」

「そういう意味じゃないわよ。トリーちゃんとどうって意味よ」

「そう呆れたように笑うハツキさん。いや、そんな『どう?』と聞かれたって……一体、何と答えれば……」

「ふむ、と。考えてみる。トリーさんと言われても……別に、普通と答える他ないだろう。いや、連れ回されたり動画撮られたりしてるけども。そうなると、『普通』では……ない、と思う。」

「それに『かわいい』やら、すぐに抱きついてきたりして、わかりやすいだのなんだの……俺が元男ということは、忘れられていないだろうか? なんだかそういう経験が初めてで……緊張してしまう。い」

や、別に――

「なんだか、すごく困った顔してるわね」

「そ、そうですか……?」

悩みすぎていたらしい。ハヅキさんに顔を覗き込まれ、反射的に顔を逸らした。いやだって、ここ一ヶ月でかなり濃いことしてるし……

「じゃあ、楽しかったんだね」

「何でそうなるんですかっ!」

「あら、違うの?」

――その言葉に、言葉が詰まった。

楽しくなかったわけ……では、ない。むしろ、久しぶりにクレープを食べたり、遊んだりして、まあ、楽しかった。けどなんだか、それをそのまま、素直に言うのとはばかられ……

「い、や。違……くは、ないん、ですけども……」

そんな、ツギハギの言葉を並べた。

ひどく歯切れの悪い俺の言葉に、ハヅキさんはただ、柔らかく笑っていた。その視線が、どうも落ち着かなくてホットケーキを焼くふりをして、気づいていないふりをした。

そんな俺に何を思ったか、ハヅキさんはこんなことを言い出した。

「……そっか。いい友だちじゃない」

「――友だち、ですか」

「友だち」。そんな聞き慣れない言葉に、俺の手が止まる。

……友だち、なのだろうか。そもそも、友だちなんてどうやったら、とか。いつから友だち、とか。どう思われてるかなんて、そんなこともわからないのに、無責任に言えるものじゃない。

冷えた気持ち溜まっていつて、不思議と手が動き出した。自分の心とは無関係に、まるで何かを誤魔化すように。

――それに、あれはきつと。

「そう見えるなら、そうなんですかね……?」

――きつと、同じ種族だから。

そう返した俺に、ハヅキさんは「そうよく」と返したきり、何も言っ

てこなかった。そんなドライな反応が、今の俺には嬉しかった。

「たくさん焼けたね〜！」

「は、はいっ……！」

楽しそうなハツキさん。かくいう俺も、なかなかテンションが上がっていた。

というか、大量に焼かれたホットケーキの前に、テンションが上がらないなんて無理だった。今までに見たことのないホットケーキの山に、少なからず俺も気持ちが高揚していた。これからこれをトッピングする、ということに、期待に胸が膨らんでいたのもあるのだけれど。

「じゃあ、早速——」

「こんにちは〜！ ミナセちゃん！」

「ぎゃあ!？」

早速デコレーションしようとしたその瞬間、部屋に響いた大声と共に、背中に何かがあたる。予測していなかった柔らかい衝撃に、思わず変な叫び声を上げてしまう。

いきなり抱きついてきた張本人に、俺は驚きながらも、誰かを理解していた。

「な、なんでトリーさんがっ!？」

「あはは、来ちゃった！」

いきなり現れたトリーさんに、状況が理解できず、抱きつかれたまま固まってしまう。

「あら〜、こんにちは。今日来たんだ〜」

「は〜い！ こんにちは、ハツキさん！」

「え、ちよつと!? 何して……っていか何でいるんですか!？」

いきなり談笑するトリーさんとハツキさん。俺を間に挟んだまま会話する二人に、なんとも言えない感情が渦巻いた。

何も聞いてないんですけど!? というセリフは、次のハヅキさんの言葉で封殺される。

「あ、ミナちゃん。今日からアニマリアの子なら予約せずに来れるようにしたの。言っただけじゃなかったっけ」

このっ、確信犯!

そんな恨めしい言葉は、トリーさんの感触のせいで固まった口からはでなかった。どうしようか、そう思っていると、不意にトリーさんが離された感覚がした。

「トリー、いきなり抱きつかない」

「ち、ちいちゃん。いきなり首掴まないですよ!」

「私置いて走って行って何言ってるの」

「ち、チシャさん!?!」

「あら、こんにちは」

振り向けば、そこにはトリーさんの首根っこを掴んでひらひらと手を振るチシャさんが立っていた。

「な、なんで……」

「トリーに連れてこられた」

「……なるほど」

「なんで納得するの!?!」

何故だろう、「トリーさん」。その言葉が出てくるだけで、謎の納得感が……

「トリーちゃん、チシャちゃん。ちょうどよかった。今からケーキのトッピングするんだけど……」

「本当ですか!?! やります!」

「せっかくだし、参加させてもらおうかしら。トリー、そのまま食べたらダメよ」

「なんで名指し!?!」

……なんだかいきなり、騒がしくなったなあ。

わいわいと生クリームやフルーツを手に、ホットケーキをデコレーションしだすさまを見ながら、不思議と笑みが漏れた。

一緒にいて楽しいなんて思えるのは、ヒトじゃないってことを忘れ

られるからなのかな。なんて。

第11話

「ネタがないっ！」

じんわりと暑くなってきた昼下がりに。

先日のケーキをもぐもぐしていた、3時のおやつ時間。前触れもなく唐突に、そんなトリーさんの叫びが響き渡った。

当のトリーさんは机に突っ伏して、ぐるぐると唸りながら尻尾を振っていた。いつもは立っているミミも元気がなさそうだった。いや、本当にどうしたんだろう。

「……どうしたの、トリー」

見かねたらしいチシャさんが、お茶をすすりながら、ケーキに手を伸ばすついでに口を開く。

研究棟がアニマリアに開放されて少し。トリーさんとチシャさんは、何かとここに現れ、俺にちよつかいをかけてくるようになった。

ちよつと前からは考えないくらい話すことが多くなったことは……まあ、嫌ではないのだけれど、ここで撮影を始めるのは遠慮してほしいのが正直なところ。いや、ある程度配慮はしてくれてるらしいみたいなのだが。

それはそれとして、トリーさんはさつきからどうしたのだろうか。

「……いや、ネタ？」

「ネタがないのっ！ 動画用のネタが！」

「……なるほど。」

「……………ああ、なるほど」

チシャさんも理解したらしく、紅茶を置いて呆れたような視線を向ける。

「アニマリアって注目されて、尻尾とかミミとか動かして人気とってたものね。そこからは面白くないと見られないもの」

「辛辣ッ！」

「ええ……」

あんまりと言えばあんまりな言葉に、トリーさんはまたもや机に撃沈した。まあ確かに、動画投稿者なんてものはネタが命なところもあるし……なかなか世知辛い部分もあるのかもしれない。詳しいことはわからないけど。

「だからお願い、ネタちようだいっ……」

そう手を合わせてお願いするトリーさんに、どうしようかという思いが芽生えた。

正直、本当に困ってそうだから、手を貸してあげたいという思いはある。……そもそも本当に、猫の手も借りたい思いだろうし。

だけど……自分は初心者だ。そもそも俺の案なんて頼りにされないだろうし。というか、そこらのやつに人目を引くようなものをあげられるはずも……

「なら、あれやればいいんじゃない?」

「え、なにになに!?!」

俺が迷っていると、チシャさんがフォークを挙手がわりに上げ、くるくると回して答える。トリーさんは、チシャさんの答えを心待ちに、顔をあげ――

「解剖」

「なんでですかっ!?!」

――予想だにしない答えに、俺が突っ込んでしまった。

「そ、そうだよいちちゃん! バイオレンスだよいきなり!」

「冗談よ、冗談」

イタズラが成功したように笑い、ケーキを頬張るチシャさんに、トリーさんは「コンプラ的にダメだからね!」と突っこんでいた。突っこむところはそこじゃないと思う。

「じゃあ、持つてる服の紹介でもすればいいじゃない。そういうの、割と人気でしょ? ねえ、ミナセ」

「わぶっ!?!」

どうしてそこで俺に振るんですか、チシャさんっ!

いきなり話題を振られ、飲んでたお茶を吹き出してしまった。

「……いや、ファッション動画なんてほとんど見たことないですよ、

俺。それに……………アニマリアの服って、どう紹介するんですか？」
「あつ、じゃあ無理かあ」

「……………それもそうね」

アニマリアの服は基本的には存在しない。現れてからまだ日が浅いし、数も少ないから、今までの服に切れ込みを入れたりしなければならぬ。

研究棟だと特注の検査着はあるものの、他だとそんなものはないし、オシヤレなものとなると加工するのも憚られ——必然と、自分でどうにかするしかないわけで。

「そういえば、トリーの服って今壊滅的だったわ。物理的に」

「何で知ってるの!？」

「クローゼットの中、縫い目ガタガタの服ばかりじゃない。奇抜なファッションって思われるのでもいいなら、動画にしてみる？」

「恥ずかしいよっ!」

ああ、なるほど。だからいつもシャツを出してるのかと、普段の服装を思い浮かべながら、自分は検査着を着まわしているという事実、に、そつと目を逸らしておく。

「でも実際、トリーっていろいろやってるじゃない。それこそいつもと違うことやらないと。コラボとかそこそこする方だし……………やってないことって、何かあるの?」

「うーん……………わんちゃんと遊んでみたりはしたんだけどね。犬の言葉でもわかれば、もっと遊べるんだけどなあ」

そう構想を練る二人。その視線はなんだか入り難い雰囲気を感じさせて……………うん、疎外感がすごい。

まあどうせ、力になれるなんて思ってもいないわけだし。そのあたりはプロの二人なら、いい案が思い浮かぶだろう。

「——ねえ、ミナセちゃんはどうか?」

「——ふえ」

「何かいいの、なーい?」

いきなり話しかけられて、思わず変な声を出してしまった。

「え、えーと……………」

ちよつと待つて。何も考えてなかった。

自分には縁のない世界だと思つて（一回だけ出たけど）、ぼーつとしていたから何も考えていなかった。

ど、どうしようか。

何か、答え方がいいのだろう。それでも、何も思い浮かばないのは事実で。変なことを言つてしまわないだろうか、とか。そういう不安が脳裏をよぎつた。いや――

そこまで考えて、トリーさんの顔を見た。

そこには、明らかに不安の表情を浮かべたトリーさんがいて。本当に切羽詰まつてるんだろなあ、と察せられた。

そんな表情を見て、思う。

――頼られてるし、頑張ろうかな。

少なくとも、今はトリーさんに頼られている。いつもはトリーさんに頼つてばかりだし……少しは、力になってあげよう。

なんだか少しだけ、気分がいい。じゃあ、何を提案したらいいのだろうか。

トリーさんのことだし、いろいろやつてはいそうだ。ファツションは……さつき言つたし。それに、チシャさんが言つてたみたいにもと違つていうのも考えないといけないし……！……

あれ、何をどう答えればいいんだ……？

忘れていた。俺は動画のことなんて何も知らないしそもそも、トリーさんの動画は少ししか見ていないかった。だから、何をしてて何をしてないかもわかつてない……！？

そう思い至つても遅かった。混乱した頭ではまとまるものもまとまらず、言葉にすらなつていないものが口から溢れていく。

「だ、大丈夫？ ミナセちゃん？」

「――っ！ はいっ！」

あまりにも返答に時間をかけすぎたのか、トリーさんに心配そうに顔を覗き込まれた。いつのまにか近くにあつたその顔に身体が強

張って、さらに思考がまとまらなくなっていく。

アニマリア、走る、初心者、犬と話せる、自分でも言える、いつもと違う、トリーさんの意外な一面？ 簡単に——！

「——け、健康診断つ……！」

「ええっ!？」

「ぶふっ……！」

混乱したまま放たれた一言は訳のわからないもの。自分でも何を言っているかわからないまま放ったその言葉に、トリーさんは恐怖と困惑を浮かべて、チシャさんは吹き出してしまった。

「それ、いいかもね。確かに人気出るかも。やってみなさいよ、トリー……ぶふっ」

「せめて笑わないで言ってよ！ 嫌だからね！ まだ一週間は余裕あるんだから！」

尻尾を足の間に。ミミを横にするトリーさん。病院が本当に苦手なトリーさんにとつては、動画とはいえ健康診断をするのは嫌なのだろう。とはいえ、一週間猶予があるからといって検査を先延ばしにするのはやめた方がいいのでは……？

「んんっ！ でもミナセ、確かにトリーの意外な一面は見せられるかもしれないけど、ハツキさんにも許可取らないといけないし……本人、こんなよ？ 面白いけど」

「そ、そうですね……」

まだ少し笑ったままのチシャさんに相反するように、申し訳ない気持ちもちが湧きあがってくる。

やっぱり、無理があった。自分は初心者で、頑張ってるトリーさんの頼りになれるような存在ではないのだ。ただ一度聞かれただけで勘違いしてただけで、役立たずには変わりなかった。俺はやっぱり、何も関わらない方が——

「ありがとうね！ ミナセちゃん！」

「——へ」

想像していたこととは違う言葉に、意識が現実に戻された。

“ありがとう”。その言葉の意味が分からず、変な声が漏れ出ていた。

「ミナセちゃん、動画に出てくれないから寂しかったんだけど……せめて、ネタ出しに付き合ってくれてよかった。一緒に動画作ってるって感じがして、嬉しいな〜って!」

輝く笑顔を振りまきながら話すトリーさんに、そんなことを言われるとは思っておらず、何も言えなかった。

トリーさんのことだから、本心……なのだろう。何の役にも立っていないのに、そんな顔をされれば、何も言えなくなるのは当たり前で。ああ、もう!

「そ、そんなことはいいですから! 動画のネタどうするんですか!」
何故か暖かく早鐘を打つ胸に無理やり気付かないふりをして、急かすように誤魔化した。ああもう、なんでこんな気分になるんだろう。

「うーん……どうしよっかなあ〜」

そう呟いて、お茶を一口。

「——ゲームしよっか!」

「思いつきり逃げてるじゃないですか!」

「切り替えはっや……」

「何も思いつかないからね!」とトリーさんはゲーム機を片手にテレビのリモコンを手を取った。切り替えが早すぎではないだろうか。そう思っていると、もうこんな時間だからか、夕方のニュース番組が流れていた。

『——海岸では、毎年多くの海水浴客が訪れ、人気を博しております。今年も、多くの子どもたちが……』

「あ、もうそんな時期なんだ……」

流れてきたのは、何の変哲もない海水浴のニュースだった。ここるところずっと部屋にいたから暑さなんて気になっていなかったけれど、もうそんな時期になっていたんだ、なんてふと思っていた時だった。

「——そっか、海!」

「な、何よトーリ。いきなり大声出して」

いきなりの大声に、チシャさんが困惑した声を上げてトーリさんを見やった。そんなことは知ってか知らずか、トーリさんは瞳をキラキラさせて振り向いた。

「海、行こうっ！」

「——は」

あまりにも唐突な、いきなりすぎる提案。しかしとても楽しそう
な、嬉しそうなトーリさんを見て、俺は。

——今までの話し合いの意味は……!!?

とは……流石に、言えなかった。

第12話

「日焼け止めちゃんと塗った？ ほら、そんな雑に塗らない！ ちゃんと全体的に……」

「ちよ、ハツキさん。そんな塗らなくても……」

「何言ってるの、ちゃんと対策しないと、日焼けして困るのはミナちゃんなんだから」

あれから数日経って、俺は今、ハツキさんに日焼け止めを塗りたくられている。

結局、トリーさんを止めることもできず……なぜか俺も誘われ、トリーさん相手に断れるはずもなく、海に行くことになってしまった。

「でも、よかつたんですか？ 今日、検査とかあったんじゃないんですか？」

「いいのよいいのよ！ アニマリアの検査は普通、一ヶ月に一回くらいなんだから」

……とまあ、そんなわけで。なぜかノリノリなハツキさんに、日焼け止めを塗れと言われて今に至るわけで。まさか、玄関先で塗られるとは思っていなかったけど。

「よし、これで大丈夫ね。それで、ここからどうやっていくの？」

「それが……トリーさんが、ここで待っててって言われて……よく、わからないですよね」

「なら、もうすぐ来るわね。ふふっ、楽しみねえ」

「は、はあ」

「あ、尻尾に日焼け止め塗っとく？」

「どうやって塗るんですか！ ちよ、尻尾掴もうとしないでください！」

日焼け止めを片手に尻尾に手を伸ばすハツキさんの手を叩き落としながら、トリーさんを待つ。

そういえば、トリーさんは海にどうやって行くつもりなのだろう

か。人がいると嫌なんだけど……まあ平日だし、帽子もあるからある程度は我慢しようか。

……その、時だった。ミミがピクリと跳ねて、それが聞こえたのは。——ブルルルッ！

と、そんなエンジンを全開まで蒸したような、異音が聞こえてきた。それは、着実にこちらに近づいていて——え、ちよつと待って、何が起こってるの？

そう混乱する頭をよそに、身構える暇もなく、それは姿を表した。

——それは、車だった。

ギヤルルッ！ という日常生活ではおよそ聞くことはないだろう摩擦音を立てて止まったそれは、絶妙な角度で俺の目の前に停まった。

まるでどこぞのアクション映画のような停め方に、顔が引き攣るのが止められなかった。そしてその中から、こんな運転をした下手人が姿を表した——

「ミナセちゃん、おはよう〜！」

「ああ……おはようございます……」

トリーさんだった。いや、こんな登場の仕方するなんて、トリーさん以外いないとは思ってたけどさあ。思わず生返事を返してしまっただ。

「トリーさん、免許持ってたんですね……」

「うん！ 海に行くから乗ってきたんだ〜」

「車持ってるなら、いつも車で来ればよかったのでは……」

「なんで？ 歩いて来れるのに」

「もつとも。」

いやそんな納得してる場合じゃなくて。ええと、どこから突っ込めば……

「じゃあ、海に行くから早く乗って！」

「そうね！ トーリちゃん、ミナちゃんお願いね！」

「任せてくださいっ」

「え、ちよっ！」

考えてしまったのが運の尽き。ハツキさんの手によって、俺は乗る方向で決まってしまったらしい。ハツキさんに背を押され、トーリさんに手を引かれる。もう引くも戻るもできず……

「ええっと、お邪魔しまーす……」

「どーぞー！」

そんな元気なハツキさんの声一つ。俺は後部座席に乗り込んだ。なんとなく、前は危ない気がして。

スライド式のドアが開いて、足をかけた瞬間だった。その奥にあったモノに、思わず体が止まる。

「——チシャさん!?!」

それは、チシャさんだった。だけどその姿は、いつもの様子とは違っていた。シートベルトで辛うじて座っていられているものの、意識があるのかなのか、窓に頭を預けてピクリとも動かない。ミミもへたれて、尻尾も心なしか元気がない。そんな今までに見たことがない姿に、思わず声を上げてしまった。

「ちよ、大丈夫ですか!?!」

「じゃあ、行ってきまーす！」

そうしている間にも、トーリさんの元気そうな声と、「いつてらっしやくい」と軽い声が聞こえてきた。かくいう俺はそんな余裕もなく、見るからにグロッキーなチシャさんに戦慄していた。

「……………ミナセ」

ピーっと、ドアが閉まる音が聞こえた。それと同時に、チシャさんが口を開いた。その言葉は、疲れ切っていて——

「シートベルト、しときなさい」

俺は、どんな顔をしていたのだろう。

ただその時、ガチンツというドアが閉まる音が、まるでなにかやばいものが始まった音に聞こえて——

「じゃあ、行つくよー!」

そうして聞こえる、異様なエンジン音。

ああ、やばい。

無意識のうちに、締めていたシートベルトを握り込んだ。なんとうか、本能的な恐怖を感じて。

その後のことは、語るべくもなく。数秒後に、地獄を見たとだけ……言っておくことにする。

「ついたよー!」

トリーさんの声が、いやに遠くに聞こえる。どうやら、目的地に着いたらしいと霞んだ意識で理解した。

「どうしたの、本格的に暑くなる前に行こう!」

「無茶、言わないで」

「いや、トリーさん……ちよつと、待って……」

元気なトリーさんが眩しい。というか恨めしい。なんだあの運転。急加速に急ブレーキにドリフトを決めて、おかげで中にいた俺は、チシャさん共々シェイクされてしまった。なんであんな運転で事故ひとつしないんだ。と、心の中で恨み言を吐いた。

「ほら、すごいよー!」

そう、トリーさんに急かされ、なんとか時間をかけて回復した身体を起こし、車を降りた。それと同時に、差し込む陽光に思わず目を伏せてしまう。

それも少しの間。すぐさま光に慣れた目をゆっくりと、外へ向けたそこには――

「ね、すごいでしょ、ハハ」

そこには、光り輝く地平線があった。

どこまで遠くきたのだろう。遠くに山や木々が見え、人もいない。まだ昇りかけの太陽がいやに眩しくて、思わず目を瞬いた。

さつきまでの車に揺り揺られた騒々しさとはかけ離れたその場所に、思わず観入ってしまった。

「どう、(´▽｀)?」

「え、あ、すごい……と思いますけど」

ふふん、とドヤ顔で話しかけてくるトリーさんに、見たままの感想を一つ。語彙力が少なくて申し訳ない気がする。

なんだか、海に来るなんてのも久しぶりな気がする。それも、こんな誰もいない秘境みたいところで。こんな場所、一体どこで見つけたんだろう。

「それにしても、よく見つけたわね。こんなところ」

「でしょ? ちよつと遠いんだけど、人も少なくて撮影もしやすいなあって思つて。それにちよつとよかつたしね!」

「ちよつとよかつた……?」

一体、何に?

そう口からこぼすと、トリーさんには苦笑気味に誤魔化されてしまった。何でそんな反応をするんだ、と聞こうとするも、トリーさんの言葉に嫌な予感がして、咄嗟にその場を離れた。

「それより、早く行こー! ちゃんと、水着も持ってきてるし! ねえ、ミナセちゃ……いない!」

……やつぱり。

と、そこらにあつた海の家らしき場所に身を隠しながら思った。いや、水着なんて着ないから。だから俺は元男だと何度言えば……本当に收拾付かなくなるから!

そんな警戒を自然に込めて、壁に隠れながらトリーさんを見やる。「一瞬でそんなところ!?」なんて聞こえるけど、そうさせたのはトリーさんだ。

そう警戒しながら睨んでいたものの、チンヤさんに引き摺り出されるトリーさんの前に戻される。……なんか、若干不満そうな目で見てくるトリーさん。いや、絶対着ないから。

「ほら、トリーもミナセをいじめるのはやめてあげなさい。そもそも、私も泳がないからね。尻尾濡れたら面倒なもの」

「ええ〜！」

「ええ〜じゃない。砂とか落とすの大変なんだから」

見かねたらしいチシャさんが、なんとかトリーさんを宥めてくれたらしい。ミミをぺたんとしながらも理解はしてくれたりらしい。ぐるぐると唸りながら、諦めてくれたみたいだった。

「う〜ん、じゃあ何しよつか。せつかく海に来たし……」

そう言つて、トリーさんはくるりと周囲を見渡して……途端に、ミミを立てた。顔はまさに閃いたという顔で、口元は最高の笑顔で。

「じゃあ、アレしよつか！」

「で、結局こういうのに落ち着くのか……」

あれから少しだけ移動して、ぽつんと一人海に釣り糸を垂らしながらそう呟いた。結局、いいのが思い浮かばず……まあ、海釣りの場所に行くことになった。のほほいもの……当のトリーさんは、

「みんな、こんにちは〜！ 今日はい——」

早速、動画撮り始めてるし。チシャさんはスマホで撮影に付き合ってるし……なんだか、取り残された感がすごい。

だから、俺はなんとなく海釣りするしかやることなくってしまつたわけだ。

少しばかり暑くなってきて、釣り竿を足で挟んで持ってきた水を飲み一息。アニマリアになってからというもの、汗をかきにくくなったのは幸か不幸か、ヒトだった頃よりも熱さに敏感になった気がする。

「……………ふう」

そんなことを考えながら、トリーさんたちを見た。網を片手にスマホを構えるチシャさんと、何かに引っかけたらしく慌てるトリーさん。撮影だというのに、なんだか楽しそうだった。

「……………」

これは、なんだろうか。

海に連れてこられて、車でミキサーにかけられて、挙げ句の果てに放置って。まあ、自分は動画に出ないって言うてるからしようがないところではあるのだけれど。

もう一度、トリーさんたちを見てみる。まるで自分を忘れたようにはしゃぐトリーさんに、もやっとしたものが胸に溜まる。動画に出ないとは言ったし、撮るためにも大変なんだろうし、連れてきてまらつておいて何だけど、少しくらい見てくれても――

「――え」

――今、何を思った？

その時、水を差すように、釣り竿が跳ねあがった。

「う、わっ……い！」

魚がかかった――と理解したのは、一拍遅れてからだだった。慌てて釣り竿を握り、持ち上げた。

あ、やばい。と察するのは早かった。こちとら釣りなんてしたことがない素人だ。せっかく始めたんだし、釣り上げたいところだけど……いかんせん、初めての体験すぎて混乱してるのもあったからか、うまくひけなすぎた。

ちよつと待って、本当に無理っ……！

そう思っ、諦めかけた時だった。

「引いてるじゃんっ、手伝うよー！」

後ろから抱きつくように、トリーさんの手が俺の手ごと釣り竿を掴んでいた。

「ト、トリーさん!？」

撮影どうしたんですか!?

なんて、聞く暇もなく。トリーさんは楽しげに釣り糸の先を見つめ、握る力をさらに強めていく。当然、そうなればトリーさんの身体

が俺に当たるわけで。

ち、近つ……!!

トリーさんが追えば追うほど、身体が押し付けられていく。手に伝わる体温と、体勢のせいでミミにかかると息が、どこかむず痒い。それに加えて——その、当たってる。前傾姿勢で俺に体重がかけられていって、その度にトリーさんの身体が押し付けられていく。

柔らかい感触と、漂ってくる香りと、海の匂い。それに照りつける熱のせいで、頭がぐちゃぐちゃになってしまう。

そのせいだろうか、身体から力が抜けた。

「わわっ!?!」

それがいけなかったんだと思う。身体が前屈みたいになって、トリーさんが俺の背を滑ってしまった。カランと音がして、トリーさんが横に転がった。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「大丈夫」

横に寝転がったまま、トリーさんは楽しそうに笑っていた。無事だったのはいいけれど……結局、逃げられてしまったらしい。だけどトリーさんは、

「あはは、逃げられちゃったね」

そう、楽しそうに笑っていて。釣りをすること自体が楽しかったらしいその笑顔に、俺は何故か、目が離せなかった。

これは、何だろうか。

顔が熱い気がする。なぜか、胸が跳ねるような感じがして。口元がちよつとだけ、緩む感じがして——思わず手を伸ばして、水を飲んだ。今日は、暑い日だ。さつきから太陽が照りつけてるし、ここは光を遮る場所もない。だからきつと、そのせいだ。いやに顔が熱いのも、きつとそのせいだ。

「じゃあ、次も——」

「ねえ、トリー」

「え、どうしたの? ちいちゃん」

そう思っていた頃、チシャさんは釣り竿を片手にスマホを構えてい

た。どうやら、トリーさんに渡されたままだったらしい。なんか、申し訳ない感じがする。

「引いてるわよ、多分これ」

「え、ほんと!？」

そう言うチシヤさんの視線の先には、まるでリズムを取るように規則正しく小さく動く釣り竿があつて。

あれ、釣りつてそんな動きしたっけ。

あまりにも奇妙な動きをするそれに、トリーさんは気にした様子もない。躊躇いなく釣り竿を持ち上げていく。なんだろう、特に根拠もないけれど、なんかいやな予感がする。

「ト、トリーさん。それ……」

「よいしょーっ!」

俺の言葉は届かず、そんな掛け声ひとつ。トリーさんの腕は天高く振り上げられた。普通に釣れたとは言い難いほどに上げられた腕の先に、大きな影が一つ宙を舞う。

——ドサッ

そんな音を立てて、それは地面に落ちた。興奮するトリーさんをよそに、俺は目を疑った。

それは、尾ひれがあつた。水に濡れたひれは、力なく地面に打ち捨てられ、時折地面に叩きつけられていた。ここまでなら、別に驚くことでもない。驚くべきは……その、頭。

それには、頭があつた。それも、人間の頭。皓^{しろ}みがかつた髪から水を滴らせ、まるで眠つたように動かなくて。

人間に、尾ひれがついてる。

そんな、普通にはありえない光景に。思わず口にする。

「に、人魚……?」

絵本で見た伝説の生物。その実在を目の当たりにして思わずそう、眩いてしまった。